

雑誌を読む

1月

中西輝政さん 一九九六年は日本にとってどんな年か、課題は何かという議論を取り上げてみたいと思います。

山下悦子さん 「ニューズウィーク」(1/17)の「日本人は何を失い、何を得たのか」が、阪神大震災を経験した人の「自分のことは自分で守らなければならない」というメッセージが分かった。...

96年の日本、国家と個人



中西 輝政さん



橋爪大三郎さん



山下 悦子さん

橋爪大三郎さん 戦後、私たちは本来的に自分たちの社会を選択した。...

とR・クーさんの対談「一九九七年の衝撃」は、アジアでは冷戦は終わっていない、アジアで「たんなる事あればいまの危機意識を示しています。...

橋爪 いま日本中の大学で「改革」の会議が開かれていない日はないくらいでしょう。「Ronza」の特集は興味深いものもありますが、全体として改革論議の裏面を掘り下げる点では、食いつかない印象です。...

◆ 私のお勧め 2点 ◆

Table with 3 columns: Author, Title, and Content. Includes entries for 藤田英朗, 池田晶子, and 季刊子ども学冬号.

◆ 読む・ガイド ◆

Table with 3 columns: Topic, Author, and Content. Includes entries for 自己変革できるか, 安全保障感覚の欠如, 新しい「国体」を求めて, etc.

自由帳 VALDES誕生 年明け早々、村山首相が退陣。代わって橋本政権が誕生した。かたや新進党首は小沢一郎氏。村山VS海部より、すつとわかりやすい対決の図式になった。...

雑誌を読む

2月

中西輝政さん 住宅金融専門会社(住専)の整理に公費を使うことが大きな論議を呼んでいます。城山三郎さんの「日本官僚の自殺」(文藝春秋)は大蔵省など官僚エリートの精神構造にまで踏み込んで論じています。ただ、エリートたる官僚はおのずから禁欲と公共性を身につけているという理想型から現代の官僚のあり方をいろいろ批判するのは、いくぶん古い発想のようにも思いました。加藤寛さんの二つの論文「住専処理」この愚かな選択(文藝春秋)、「金融農本主義を排す」Voice)のうち、「文藝春秋」の方は財政の専門家としていくつか建設的で踏み込んだ提案をしています。住専問題は貸手の農林系金融機関の問題を通して当然農業にかかわっている。その意味で「Voice」の論文も見逃せません。正村公宏さんの「国家の危機と財政の危機」(THIS IS 読売)は長年財政問題を論じてきた方が新しい視点を示したもので、注目しました。

橋川大三郎さん 住専問題は水山の一角。背後には日本の銀行全体がかかえる巨大な信用不安がある。いくつもの論文によれば、銀行の不良債権は大蔵省の言う四十兆円どころか百兆円規模だといふ。今回六千八百五十億円を支出するについては「金融不安を起ささないためが大蔵省の脅し文句です。しかし本当にそうなのは国民には分からない。住専破たんの原因を分析する論文は多いが、この点をスバリ明らかにするものはなかった。その中で加藤寛さんの「住専処理」この愚かな選択が明快で説得力がありました。住専問題を解決してこねば日本の国際的信用は致命的な打撃を受けて日本経済は立ち直れなくなる。それを防ぐためには公的資金まで投入して住専問題を解決すると明確に宣言する必要がある。ただし、この公的資金投入は凍結しておいて一方で省庁の徹底した行革を進めるべきだと「言いつつ、住専問題の禍を行政に筋道をつける福に転じてきた」といふ議論です。

山下悦子さん 全体にこの問題に対する怒りがあまり反映されていないと思いましたが、大前研一さんの一決定版「大蔵省解体論」(サンサーラ)は大蔵省への怒りをストレートに出して、共感しました。大きな問題である暴力団のかかわりについても「闇の世界の人たち」という言葉で表現されています。「エコノミスト」(1/30)の特集「銀行・住専 不良債権の暗黒列島」もその点で面白かった。「日本を食うヤクザ資本主義」「経済のマフィア化」といった言葉も使われていて、一九八〇年代に地上げを介して暴力団が経済界に深く介入していった実態も匿名座談会で話されています。加藤寛さんも「文藝春秋」の論文で日本は近代国家ではないと指摘され、間接金融のシステムなど近代日本の歴史の中に住専問題の背景を探っています。「週刊金曜日」(2/9)の「住専一揆」では、佐高信さんが「怒りの預金引き出し運動を」と具体的な行動を提案しています。

橋川 日本がまともな近代国家でないという経済界と「闇の世界」とのつながりの問題は確かに一つのポイントです。日本では農業など第一次産業従事者や自営業者の多くは事実としてほとんど税金を払っていない。一方サラリーマンのほとんどは会社に納税計算をまかせているので納税者としての自覚がない。税金、広く言えば「お金」について近代国家にはそれなりのルールやルールがあるわけですが、こうした状況の日本ではそういうことが公然と語られる伝統がないのではないのでしょうか。



中西 輝政さん



橋川大三郎さん



山下 悦子さん

住専問題の背景を探る

よいか。この点に光を当てたのが伊丹十三監督の「マルサの女」以来の一連の作品です。「ミンボーの女」は民事介入暴力の世界を描いたものでした。しかし、伊丹監督は「闇の世界」から逆襲されて、顔を切られましたね。かなり本質的問題を突いていたのだと思います。ジャーナリズムは伊丹監督を孤立させることなく、この問題に早くから食い込んでいきました。今回

自由帳

世末という時代は何ごとにつけ、トリッキーなことが多くなる。「トリッキー」とは、トリックに満ちたつまり油断のならない、狡猾な、手の込んだ、といった意味だが、最近の国際情勢を見ていると、まさにその感を深くする。

先日の平壤におけるロシア大使館人質事件や、一気に増加し始めた感のある北朝鮮からの亡命者の報道に、何やら切迫したものを感ぜさせられる。昨年の記録的な大水害の影響が、その

そのとき」に備える

葉が飛び交い、他方でアメリカは日韓との調整を詰めないまま、独自の北朝鮮接近政策に踏み切り始め、日米韓はバラバラの対応が目立ってきた。

一方、台湾では三月の総統選が近づくと、中台間の対立が激化し、アメリカ

だと思ふ。人間が変わらない限り、小手先の機構改革をやっても解決しないのではないだろうか。

中西 今回読んだ議論では「世代論」が欠けていたように思えます。昭和二年の金融恐慌を乗り切ったころや戦後の山証券の経営危機問題のときにみられた日本の官僚の中の責任感が八〇年代以降完全に枯渇してしまった。これは大手都市銀行についても、政治家

いづくも感情的な議論とマッチしているためによく出てくるのですが、危機管理のシステムの問題と責任追及の問題をどうかみあわせるかという知恵を身につけないといけない。そのためにも国際比較論がほしいかと思ひます。

山下 責任追及は重要だと思ひます。それが近代国家のルールにそってきつと制を加えてほしい。責任追及のことでは、飯田経夫さんがこの期に及んで「それでも悪いのは米國だ」(Ronza)と語っているのははちやうと納得できません。た

中西 日本のパブルがアメリカのレバレッジに起因したという点はかなりの当たっている。飯田さんは日本型システムが本場にトータルにたぬのか、それを全部捨ててあなた方はアメリカ人になれるんですか、と突っかけていて、これは大きな問題です。私は、経済問題だけでなくオウムにしても阪神大震災にしても、さらに日米安保の見直し論にしても、だれかが何かをしてくれるという、私たちのいわばパブルの世界観が問われていると思う。そこでキーワードは自己責任と

◆ 私のお勧め 2点 ◆

(月刊誌はすべて3月号)

中西	①「親米入亜」の総合戦略を求めて ②オウム捜査「極秘ファイル」	寺島実郎 中央公論 麻生幾ほか 文藝春秋	①ゆるやかな自主防衛を構想し日米軍なき安保と日米軍協力を考察②オウム熱さめた今こそ価値あるルポ
橋川	①特集・中国脅威論の虚実 ②特集・バブルの第一責任は大蔵省にはない	毛里和子、田中明彦ほか 世界 西部邁、佐伯啓思ほか 発言者	①経済、軍事、台頭する中国パワーを多角的に検証 ②大蔵バッシングは甘えた無責任と切り返す辛口論調
山下	①私はガンになった - 医学と医療との間 ②スーパースターの新たな闘い	犬養道子 世界 ニュースウィーク 2/14	①スイスでのガン闘病記。薬づけの日本への疑問も ②エイズとの共生を目指すマジック・ジョンソン

◆ 読む・ガイド ◆

日本官僚の自殺	城山三郎 文藝春秋	現在の一部官僚は右手に権力、左手に私欲ではないか
「住専処理」この愚かな選択	加藤寛 文藝春秋	住専問題処理を日本の構造改革の第一歩と位置付けよ
金融農本主義を排す	加藤寛 Voice	行政の下請け・農協を組織改革して日本の体質改善を
国家の危機と財政の危機	正村公宏 THIS IS 読売	財政危機を生み出している政治の退廃を断ち切るべき
決定版! 「大蔵省解体論」	大前研一 サンサーラ	金融危機を自作自演する大蔵省をいまこそ断罪しよう
特集 銀行・住専 不良債権の暗黒列島	山田齊ほか エコノミスト1/30	「ヤクザ資本主義」の実態と諸悪の原点大蔵官僚の罪
住専一揆 怒りの預金引き出し運動を!	佐高信 週刊金曜日2/9	意思をもって主体的に引き出すのは「騒ぎ」ではない
それでも悪いのは米国だ	飯田経夫 Ronza	アメリカのいいなりにならず自らの国家戦略を作れ
腐敗した大蔵の絶対権力	G・クラーク Ronza	巨大権力を持つ大蔵省の保守主義が日本を危うくする
ふたたび言う「死ぬな!」	椎名誠 文藝春秋	学校は人生の中のわずかな時間の小さな世界なのです
軽やかな教育大衆化の危うさ	竹内洋 THIS IS 読売	いまの受験社会はシステムに飼育された主体製造工場
いじめと「内的権威」	河合隼雄 世界	「内的権威」を身につけるのを怠ってきた日本の大人
座談会・仮想現実に征服された僕らの時代	笠井潔、中島梓、夢枕獯 世界	現実を超えた世界を描く3作家が語る現実世界の深層
不況の終わり、停滞のはじまり	高橋伸彰 中央公論	手段のはずの成長がいつのまにか目的にすり替わった
村山内閣の歴史的「意味」	林健太郎 諸君!	戦後日本の「無責任」の体現者・村山内閣の功と罪は

は、やがてかと言えは週刊誌がくわいなく取材して頑張っています。

日本の前近代性という点では、昔の銀行の方が銀行らしかった。加藤寛さんの「金融農本主義を排す」が三井銀行再建に取り組んだ中上川彦次郎にふれています。初期の銀行マンは近代社会の根本である契約を守る論理を体張って定着させていった。それに比べ今の銀行は墮落している。システムよ、そこに生まれる人間類型が問題

なかにい・てるまき 京都大学教授(国際政治)

▽はしつめ・だいさぶろう 東京工業大学教授(社会学)

▽やました・えつこ 女性史研究家

雑誌を読む

3月

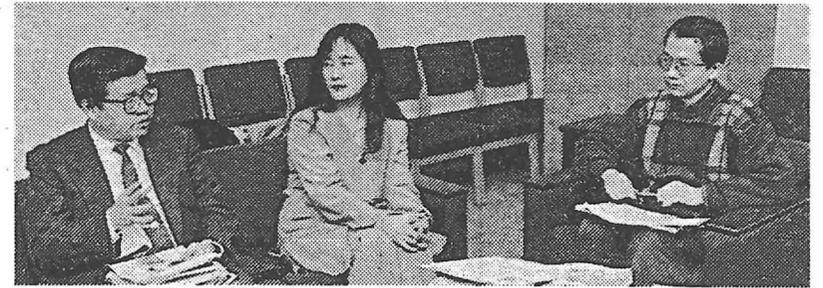
◆私のお勧め 2点◆

(注記した以外の月刊誌はすべて4月号)

中西	①中国に食糧危機は来ない ②グローバル化と地域社会	白石和良 諸君/ 榊原英資 発言者	①世紀末に飛び交う俗説の1つを論破 ②21世紀世界の二面性を鋭く提起する
橋爪	①カンター代表の偽善 ②オウム後の世界を作るのは誰だ	M・レヴィンソン 中央公論 芹沢俊介、宮台真司 サンサーラ	①強硬な交渉スタイルも米国の雇用を改善しなかった ②オウムに通じる接触障害系、茶髪ピアス系の若者像
山下	①世紀の離婚 ②いま「いじめ」を考える	ニュースウィーク 3/13 週刊金曜日 3/15	①エ女王の「母親像」「親子の断絶」にもふれる特集 ②いじめによる不登校生たちの苦闘の手記を一挙掲載

◆読む・ガイド◆

米中よ喧嘩はやめなさい	片岡鉄哉 Voice	日本が日米安保と米中紛争の板ばさみから逃れる道は
シナを洗う二つの波	入江隆則 Voice	台湾でアジアと西欧の2つの海洋思想が出合っている
<分析>台湾海峡 軍事危機	坂東賢治ほか エコノミスト3/12	現状維持のためにも中台関係の新しい枠組みが必要だ
軍も金正日を見放した	佐藤勝巳 諸君/	冷静に分析すれば金父子独裁体制の崩壊過程は明らか
特集・香港大研究	THIS IS 読売	繁栄かゴーストタウンか。多彩に香港の「今」に迫る
近代世界に包摂される中国	今村仁司 THIS IS 読売	上記特集の一環。近代性の一般傾向に沿う巨視的考察
中国 危険な戦争ゲーム	ニュースウィーク 3/20	ミサイル演習強行で中国への風当たりは強まるだろう
文明史観を覆す新発見	朱建栄 Ronza	長江文明の新発見は文明の定義そのものを問い直すか
対談・沖縄の非軍事化を提唱する	堤清二、M・モチヅキほか 世界	安保は外交問題。なぜ日本の外交政策が不透明なのか
徹底討論・日本人はなぜ韓国が嫌い	田中明、上坂冬子ほか 文藝春秋	竹島問題が再燃し日本人に嫌韓感情が生まれている?
破防法入門	橋爪大三郎 広告批評3月号	公共の安全を守るために国民は何をがまんするべきか
追悼特集・さようなら司馬遼太郎さん	丸谷才一、田辺聖子ほか 文藝春秋	「この国のかたち」最終回は「歴史の中の海軍」の続き
司馬史観と日本史学	山崎正和ほか 中央公論	五百旗頭真氏との対談。司馬作品の明るさと無常感と
知恵と気概の文学	谷沢永一 正論	司馬作品には人の世に生きる知恵への思い入れがある
風速計	週刊金曜日 3/1、18、15	佐高信、本多勝一、筑紫哲也氏が「司馬追悼」へ異論



左から中西輝政さん、山下悦子さん、橋爪大三郎さん

自由帳

夫婦別姓への賛否

今年民法改正が四十九年ぶりに行われることになっている。女性の高学歴化、社会進出が進展し、男女ともに晩婚化の傾向、少子化現象が定着した現在、結婚や家族、男女のあり方も大きく変化しているわけだ。民法の見直しは当然のことであろう。法制審議会民法部会によりまとめられた「民法改正要綱案」によれば、改正の主な内容は、夫婦は婚姻の際に同姓(夫が妻の姓を名乗るか、別姓)を名乗るか、別姓(それぞれの婚姻前の姓)を名乗るかを選択する別姓選択制が導入される、「離婚原因」に夫婦が五年以上同居を怠っていることが加えられる、非嫡出子の相続分が「嫡出子の半分」から「同等」になる等々。これらが実現されれば日本の社会の別姓の是認は家族解体の最終段階である「といったもの」のあり方の変化に拍車がかかることとなるだろう。聞かなくてはいけぬのは、自民党の年輩の男性政治家に反対者が多いことだ。

今月の雑誌でこの点を取上げたのは、「サンサーラ」の「発言者」であった。日常的な男女・夫婦、家族のあり方の変化に拍車がかかることとなるだろう。聞かなくてはならないのは、自民党の年輩の男性政治家に反対者が多いことだ。

民法改正要綱案によれば、改正の主な内容は、夫婦は婚姻の際に同姓(夫が妻の姓を名乗るか、別姓)を名乗るか、別姓(それぞれの婚姻前の姓)を名乗るかを選択する別姓選択制が導入される、「離婚原因」に夫婦が五年以上同居を怠っていることが加えられる、非嫡出子の相続分が「嫡出子の半分」から「同等」になる等々。これらが実現されれば日本の社会の別姓の是認は家族解体の最終段階である「といったもの」のあり方の変化に拍車がかかることとなるだろう。聞かなくてはならないのは、自民党の年輩の男性政治家に反対者が多いことだ。

冷戦後の東アジア情勢

橋爪大三郎さん 「Voice」の片岡さんの分析は本質を的確に捉えていると思います。「THIS IS 読売」の特集「香港大研究」は香港財界の実情や中国進出について取材したもので、香港の置かれている状況を浮き彫りにして面白かった。「諸君」の佐藤勝巳さん「軍も金正日を見放した」は公開された資料やさまざまな状況から北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)内部での権力闘争の実態や中国の影響について深い分析をされています。冷戦後の東アジアは、たまたまの数々が重なった連立方程式になっています。冷戦時代は、せいぜいアメリカと中国を軸にした対峙構造が多かったのですが、最近の東アジアは経済成長が極めて活発で、ほんの数十年前に国際的力関係や経済関係が大きく変化しています。そういう意味で非常に不安定で、それぞれの国が利益を求めて行動すれば当然争いが生じます。大きな歴史の流れでは相対的に安定していた伝統社会が次々に産業化して、時代状況にあるわけです。

山下悦子さん 国際政治の素人としては「ニュースウィーク」(3/20)の「中国 危険な戦争ゲーム」の中の「二つの中国」が分かります。二つは「ニューズウィーク」(3/20)の「中国 危険な戦争ゲーム」の中の「二つの中国」が分かります。二つは「ニューズウィーク」(3/20)の「中国 危険な戦争ゲーム」の中の「二つの中国」が分かります。

中西「諸君」に白石和良さんという農水省の研究者が「中国に食糧危機は来ない」を書いてくれています。かつての「俗説」を退けたものですが、確かに経済が発展して市場メカニズムがあるところには少なからぬ食糧危機が起ころうという懸念はあります。環境問題なら分かりますが、現在の東アジアではあらゆる国からの情報戦略が動いていて、日本のメディアはそこで全体図が描けず右往左往している。今回の中台問題もその一つだと思えます。片岡鉄哉さんの「米中よ喧嘩はやめなさい」は、アメリカでは冷戦後の唯一の超大国として世界をリードしていかなくてはならないという国家意思と孤立主義的傾向に傾きがちの国民の間で分裂があると指摘しています。アメリカの「世界」へのかわり方の不透明さが東アジアの状況を見えにくくしている。今度の中国と台湾の問題にしてもそうです。

橋爪 東アジア各国の国民性も十分認識する必要があります。「文藝春秋」の「徹底討論・日本人はなぜ韓国が嫌い」の田中明さんの分析はなるほどと思わせる部分もあります。明の味方を清に負けてしまった後、清の属国になりながら心の中では満州族の清

中西「諸君」に白石和良さんという農水省の研究者が「中国に食糧危機は来ない」を書いてくれています。かつての「俗説」を退けたものですが、確かに経済が発展して市場メカニズムがあるところには少なからぬ食糧危機が起ころうという懸念はあります。環境問題なら分かりますが、現在の東アジアではあらゆる国からの情報戦略が動いていて、日本のメディアはそこで全体図が描けず右往左往している。今回の中台問題もその一つだと思えます。片岡鉄哉さんの「米中よ喧嘩はやめなさい」は、アメリカでは冷戦後の唯一の超大国として世界をリードしていかなくてはならないという国家意思と孤立主義的傾向に傾きがちの国民の間で分裂があると指摘しています。アメリカの「世界」へのかわり方の不透明さが東アジアの状況を見えにくくしている。今度の中国と台湾の問題にしてもそうです。

橋爪 東アジア各国の国民性も十分認識する必要があります。「文藝春秋」の「徹底討論・日本人はなぜ韓国が嫌い」の田中明さんの分析はなるほどと思わせる部分もあります。明の味方を清に負けてしまった後、清の属国になりながら心の中では満州族の清

▽なかにし・てるまさ 京都大学教授 国際政治学

▽はしむめ・だいさぶろう 東京工業大学教授(社会工学)

▽やました・えつじ 女性史研究家

雑誌を読む

4月

◆ 私のお勧め 2点 ◆

(注記した以外の月刊誌はすべて5月号)

中西	①日本は騙された— 湾岸戦争の闇 ②中国の軍隊は「張りの虎」か④	阿部重夫 諸君/ D・ジャンボウ 世界週報4/23	①闇の部分を含め、本当の意味で「湾岸の教訓」を知る ②メディアの誇張された脅威報道を客観的に正す
橋爪	①「島田裕巳問題」を解く(連載) ②情報革命と新安全保障秩序	日垣隆 Ronza J・ナイ、W・オー エンズ 中央公論	①ワイドショー人民裁判の虚報の構造を冷静に検証 ②米国はテクノロジーの優位—「情報の傘」を活用せよ
山下	①官僚の謎 ②狂牛病パニック	ダイヤモンド 4/20 ニューズウィーク 4/10	①官僚批判の大特集。「官僚出世すごろく」は必携! ②欧州を激震させた「狂牛病騒動」を冷静に分析

◆ 読む・ガイド ◆

この国の危機をいかに救うか	柳田邦男 文藝春秋	戦後システムの隠れた特質を分析、変革へ4つの提言
前大蔵官僚「田谷廣明」の独白	岸宣仁 論争 東洋経済	スキャンダル渦中の人物にインタビュー、本音に迫る
大蔵省から金融を引き離せ	塩崎恭久 中央公論	日銀出身の政治家が大蔵省の組織改革の必要性を強調
対談・われら体験的大蔵批判	佐々淳行、長富祐一郎 中央公論	官僚出身の2人が大蔵腐敗を憂え、体質改善を訴える
座談会・住専問題は「不良銀行」「不良官僚」問題だ	奥村宏、佐高信他 週刊金曜日4/5	政・官・業の構造的経済犯罪に預金引き出しで対抗を
討論・不思議な国の不思議な官僚たち	N・クリストフほか 文藝春秋	在日海外ジャーナリスト3人が天下りなど痛烈に批判
特集・官僚たちの日本	THIS IS 読売	竹内靖雄氏による「霞が関封建制」の崩壊の指摘など
ばか殿教育が大蔵をダメにした	AERA 4/1	20歳代後半で税務署長経験し植え付けられるお上意識
特集・学校はよくなっているか	世界	対談で毛利衛氏は「学校は必要のない知識を捨てよ」
特集・平成「いじめ」白書	Voice	いじめの根源は選択肢をなくしたこと、と渡部昇一氏
「教師の娘」の立場から	清水ちなみ 文藝春秋	娘から見た教師の特性とは公務員としての特性だった
社会問題化するパリの校内暴力	武井東子 週刊金曜日3/29	荒れる仏の学校の背景に移住・失業問題が潜んでいる
対談・中国は異質な国ではない	木村尚三郎、中西輝政 Ronza	中国はアジア型の民主化を遂げ徐々に普通の国になる
孤立の日本—日米安保の拡大と深化	北岡伸一 外交フォーラム4月号	米中露3大帝国に囲まれた日本の安全保障の条件とは
麻原彰晃「狂気の誕生」	高山文彦 現代	生い立ちからたどるオウム教祖の「内なる暗闇」の軌跡

深刻な日本の官僚制度



中西 輝政さん



橋爪大三郎さん



山下 悦子さん

山下悦子さん 3人の外国人記者の座談会「討論 不思議な国の不思議な官僚たち」(文藝春秋)で、結局、教育ママや学校、マスコミなど国民全部が参加して大蔵官僚が頂点である受験エリートを生産している日本の受験教育のシステムに問題点があると指摘されています。なるほどと思いました。

中西 この座談会は、国内の問題について外国人の視点をメディアがこれほどメジャーな形で取り上げる国は日本以外にはないだろうという意味でも面白かった。議論の内容では、ニューヨーク・タイムスのニコラス・クリストフさんが官僚の問題は基本的に政治家の問題であり、それは帰するところ国民の問題なんだ、「大正論」を提起しています。今回、たかさんの論文があったわりにはこういう議論が少し欠けていたと思いました。

山下 教育の問題と関連しますが、「AERA」(4/1)の「ばか殿教育が大蔵をダメにした」は、20代後半で税務署長になるような大蔵省キャリア組が特権化され、甘やかされている実態を描いて面白かった。こうしたエリート養成のシステムは限界に来ているように思います。塩崎恭久さんの「大蔵省から金融を引き離せ」も大蔵省が時代の流れに遅れている状況を率直に認めている点で共感しました。東大法学部卒でもう対応できないんだといった言い方もしています。

中西 戦後の民主改革も官僚制だけは手をつけなかった。人事の仕組みから官僚の意識まで戦前の官僚制がそのままの継承されました。しかし、高度成

長以来の日本社会の問題はもう戦前から引きずってきた官僚制では対応できなくなっている。塩崎恭久さんが言う「東大法学部卒」は象徴的で、栗書エリートで問われている行政の透明性にしても、現代社会で悩んだり、いろんな経験をしてきた人でないとは理解できない。東大法学部で解釈法学を修めても、そこではリーダになれない。民主主義が成熟した高学歴・核家族社会の日本ではかつての啓蒙主義的な官僚の役割がほとんどなくなっ

日本に長くいて結局同じことだと分かったぞうです。形は違いますが、外部の批判から自分たちを守るように官僚組織の本能ではそんなに変わらな

「習慣」の中にあるわけですね。エリートについて言えば、エリートは社会機能として必要だと思つ。問題は日本の官僚がエリートではない点です。エリートは自己の能力によって仕事をし、人々を導く社会的機能を担う。官庁の「エリート」は能力ではなく権

限で仕事をしているに過ぎない。権限をはずれたとたんに「たの人」になつてしまふ。まず「学校エリート」として官僚の入り口にとどつき、後は権限の大きいポストに向けた昇進競争をしていく。天下りなどのライフコースを含めて日本の官僚の行動様式を支配している文化がそこにある。これは中西さんが言われたように戦前から持ち越されてきた。民主主義社会とマッ

限で仕事をしているに過ぎない。権限をはずれたとたんに「たの人」になつてしまふ。まず「学校エリート」として官僚の入り口にとどつき、後は権限の大きいポストに向けた昇進競争をしていく。天下りなどのライフコースを含めて日本の官僚の行動様式を支配している文化がそこにある。これは中西さんが言われたように戦前から持ち越されてきた。民主主義社会とマッ

限で仕事をしているに過ぎない。権限をはずれたとたんに「たの人」になつてしまふ。まず「学校エリート」として官僚の入り口にとどつき、後は権限の大きいポストに向けた昇進競争をしていく。天下りなどのライフコースを含めて日本の官僚の行動様式を支配している文化がそこにある。これは中西さんが言われたように戦前から持ち越されてきた。民主主義社会とマッ

自由帳

やかな楽しみのためにつく
り出した、決して高級とは
言えない文化が、なぜか外
国の人びとに受け入れられ
ている。テレビ番組「おし
ん」も、NINTENDO
のマリオも、カラオケも。
加藤氏は今とやら日本は
だという。カラオケにはそ
うした日本人の「行動文法」
が色濃く反映されている。
日本人が、文化が双方方向に
影響しあうことに気づくの
はよいことだ。アジア各国
から訪れる青年たちが、こ
こでの討論にどう反応して
くれるのかも楽しんだ。

（橋爪大三郎）

海を渡るカラオケ

非物質文化の面でも世界に
うした日本人の「行動文法」
が色濃く反映されている。
日本人が、文化が双方方向に
影響しあうことに気づくの
はよいことだ。アジア各国
から訪れる青年たちが、こ
こでの討論にどう反応して
くれるのかも楽しんだ。

（橋爪大三郎）

雑誌を讀む

6月

橋爪大三郎さん 安保の再定義をめぐり...

山下悦子さん 最近、北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)問題...

中西輝政さん 不透明だったのは、安保再定義が官主導...

安保再定義の語られ方



橋爪大三郎さん



山下悦子さん



中西輝政さん

はなぜなのか。また、米側が「憲法の範囲内でガイドラインの見直しや防衛協力の緊密化を要する」と...

「日本の生命綱」であることを国民は十分理解しない。それが切れかかっていくという危機感があるから...

橋爪 集団的自衛権を扱ったものでは二つの論文が目につきました。一つは猪木さんの「吉田茂の呪縛」...

◆ 私のお勧め 2点 ◆

(注記した以外の月刊誌はすべて7月号)

Table with 3 columns: Author, Title, and Content/Source. Includes entries for Hashizuma Daisaburo, Yamashita Etsuko, and Nishikane Keisaku.

◆ 読む・ガイド ◆

Table with 3 columns: Author, Title, and Content/Source. Includes entries for various authors and their works on international relations and security.

自由帳

先週のロシア大統領選 選挙の結果は、予想された通り... 冷戦後世界の民主選挙の諸相...

雑誌を読む

7月

中西輝政さん 行政の構造、国の運営のあり方が「90年代型改革」というパラダイムで論じられ、その中で地方分権の問題も出てきています。「Voice」の堺屋太一さんの「魅力ある国をめざして」や「THIS IS 読売」の屋山太郎さんの「橋本政権で改革はできない」では、規制緩和や行政改革と地方分権の問題がリンクして論じています。「遷都論」も絡んで議論がまた拡散していると感じました。「世界」の特集「分権自治革命」の5人の学者による共同報告「分権はなぜいま必要か」は、地方分権の推進を「自治的市民像」という角度から体系的に論じています。またインタビュー「分権で首長の感受性は格段に高まる」(世界)で浅野史郎・宮城県知事は現場の感覚で語っています。もう一つ「下から」の議論がいくつかも出ていました。一方、佐藤光さんの「二つの地方分権論」(発言者7月号)は、経済という視点から分権論を超越する必要があると述べています。確かに、「道州制」のように経済的効率を前面に押し出す分権論だけでは済まない。

方向不明確な「分権」論議



中西 輝政さん



橋爪大三郎さん



山下 悦子さん

橋爪大三郎さん 70、80年代を通じて、中央と地方の関係、中央の官僚機構は、問題はあるながらもそれなりに機能していたと思えます。高度成長のバイを都市の工業と地方の農業の間で調整して分ける機能を中央官庁が果たしていた。その時代は終わり、今の改革議論は、どれくらい税金を払う、どれくらい効率的な政府を国民が作るかという選択の問題になった。「サンサーラ」の田原総一郎さんと斎藤新一郎さんとの対談「増税なき大福祉国家は作れる」で述べられているように、もはや選択肢は「親切重視国家」か「冷酷税」国家しかない。現状ではじり貧が加速するばかりだったところへ、大蔵省や沖縄の問題が重なってきた。

中西 生田さんは、なぜ大蔵省改革が実現しないかについては結局「大蔵省陰謀説」が、他の規制緩和論でも「だれが悪いから進まない」という議論が抗いますが、改革を論ずる以上は反対勢力の抵抗を打ち破る戦略論があつていかなくては、ただ「こゝろ」で論じているように、沖縄にしても市民社会は成熟して何もかもうまくいく、という前提があります。これは形を変えた反体制で、左翼的な信念をすべてと読めてしまう。そうした論の現実性が薄いと思うのは、地方の方が地方分権しようと思っていないからです。一番地方の自律性があるところから政府との距離を明確に意識しているのは沖縄ですが、比屋根照夫さんが「沖繩——自立・自治への苦闘」(世界)で論じているように、沖縄にしても

必要な時にはトラスチックな改革をやる能力と精神が脈々と続いてきた。中西 明治維新改革、戦後改革になぞらえて、今、同じ規模の改革が必要だという議論がありますが、これは二つの面から力加チャアだと思えます。一つは、明治の改革も戦後改革も「バータン」やり過ぎだったことです。また、今は現状維持、あるいはこれまでもの政策を大きく変えないというのが明治や戦後とは比較にならない強固な

自由帳

鳩山由紀夫氏は、新党に「自由と平等の戦い」だ。なかなか而立しない(両者)「なげ懸け橋」なるべき考えかどうかが、「友愛」……どう心の問題だ(「ソフトクリームは甘くない」Voice) 8月号)。「うほう、たこ」は伊藤達美氏は、今回の新党構想に批判的である。新党イメージだけが先行して、政党としての具体的な政治理念、政策を……まったく提示できなかった

「鳩山新党という二度目の幻想」『文藝春秋』8月号。いづゆるハトフネ新党は、船田元氏が6月に参加を撤回したので、振り出しに戻った。だが総選挙が近づけば、鳩山氏の「新党構想」そうならない。社民党、新党

ソフトクリーム論争

が、再び政界の焦点となる。これまで何回か、既成政党の行き詰まりを背景に、新党チームが巻き起こった。新自由クラブ、日本新党、どうも①急速に議席を増やし②連立に参加し、自民党、新進党からみれば、自民党、新進党が登壇すれば、手頃な新党が登場する

さきかげは間に埋もれて大苦戦だ。共産党ががんばりそうだが、連立にからまないので、いわば計算外。その新党が、キャスティング・ボートを握るのには、有権者はもう甘くないと、政治家も覚悟はしておかなくてはならない。 (橋爪大三郎)

◆ 私のお勧め 2点 ◆
(注記した以外の月刊誌はすべて8月号)

中西	①特別企画 日本の岐路を問う ②対談 信長の中国征服計画	内田健三、曾根泰教ほか 文藝春秋 今谷明、宮上茂隆 Voice	①日本の進路に関し日本人の間にある劇的分裂を示す ②信長像の再検討なくして21世紀の構想も生まれない
山下	①初公開 山口瞳のラブレター ②電磁波社会の恐怖!	山口治子 中央論 平澤正夫 サンサーラ	①夫人への手紙。2人で見た映画、芝居リストは庄巻 ②携帯電話などの電磁波の人体への影響と規制の現状
橋爪	①あるがままの台湾 ②中国の歴史サイクルからみた社会主義市場経済	李登輝、大前研一 Voice 金観寿、劉青峰 世界	①民主的な主権国家・台湾は、独立宣言など必要ない ②改革開放の現状は清末の混乱・分裂過程そっくりだ

◆ 読む・ガイド ◆

インタビュー	分権で首長の感受性は格段に高まる	浅野史郎 世界	分権は権力闘争。個別の分野ごとに勝負するしかない
共同報告	分権はなぜいま必要か	神野直彦、辻山幸宣ほか 世界	自律的な市民の行動が「下からの公共性」を形成する
沖縄——自立・自治への苦闘		比屋根照夫 世界	近代日本の「植民地支配」に抗した沖縄の歴史的体験
二つの地方分権論		佐藤光 発言者7月号	今の分権論は中央と地方との関係に関する理論がない
捏造された「日本改革論」		佐伯啓思 発言者7月号	専門主義と市民主義の結合の上に安住する社会改革論
「魅力ある国」をめざして		堺屋太一 Voice	東京の主人は都民であり、首都機能は同居人にすぎぬ
橋本政権で改革はできない		屋山太郎 THIS IS 読売	まず県単位で分権を断行しその後道州制などに移行を
対談 増税なき大福祉国家は作れる		田原総一郎ほか サンサーラ	12州257府の府州制、国は5庁への統廃合で日本再編
「大蔵省改革」頓挫で危惧される日本の将来		生田忠秀 Foresight No.6	首都機能移転に期待するしかない、と霞が関に悲観論
官僚接待 あの屈辱の日々		川野亨 文藝春秋	大蔵官僚のひどさは傲慢不遜という言葉で語れぬほど
対談 W杯は本当にうまくいくのか		小此木政夫、池東旭 中央論	共催で両国のパートナーシップが生まれる(小此木)
マフィアに翻弄された日韓サッカー界		池東旭 Ronza	FIFAに食い逃げされた日韓は単独開催を主張せよ
W杯共同開催で加速する「反日」		豊田有恒 正論	反日と嫌韓のセット論法には屈折した対日心理がある
W杯「日韓共催」はアジア蔑視の産物だ		二宮清純 現代	日韓は協調し欧米サッカー・マフィアと対峙すべきだ
対談 「地震注意報」をなぜ出さない		小松左京、茂木清夫 中央論	社会的コストの小さい注意報で災害を軽減する思想を

雑誌を讀む

8月

中西輝政さん この8月も、多くの雑誌が日本の戦争責任問題を取り上げています。しかし論議のあり方に、三つの点が気になりました。一つは戦争に対する評価や対応が際立って対極的になってしまったことです。冷戦が終わって戦後の構造が崩壊しているにもかかわらず、ますます分裂的傾向になっている。具体的には「世界」の特集「あいまいな50年」からの訣別「一週刊金曜日」(8/9特集「戦後51年 ますます強まる戦争責任否定現象」)と、「正論」サンサーラ「汚辱の近現代史」(藤岡信勝「汚辱の近現代史」)などが教科書問題を取り上げましたが、諸外国の教科書が自国の歴史や植民地支配をどう扱っているかという視点が少ない。三つ目の特徴として、若い世代の日本人が「見ているか」に関して責任感に富んだ議論が見られませんが、「文藝春秋」の秦郁彦さん、高木健一さん、山崎朋子さんの「日本のつぐない」大論争をみます。秦さんと、高木さん、山崎さんとの間には大きな溝があります。両者とも道徳的な正しさを立証しようとして、自分の価値観を絶対視しない。「AERA」の特集「日本人とナショナリズム」が教科書問題も含めて論じていますが、日本人にとってのナショナリズムの問題を直視しなければフェアな議論はできません。

山下悦子さん 従軍慰安婦問題が大きくクローズアップされています。戦後補償問題を人権の立場からどう考えるか。「文藝春秋」で秦さんは「強制」という事実が本当であったのか?をめぐって批判的な見方をし、「正論」の中村黎さんは「慰安婦問題に潜む虚偽」で「尤もらしい装いをこらしながら虚構と欺瞞だらけである」としています。一方、「世界」(「従軍慰安婦」問題の解決のために)と「軍縮問題資料」(「慰安婦」問題のこれからの)で吉見義明さんは、強制があったという立場から、あいまいな日本政府の立場を批判しています。文獻などに見られる当時の軍隊の女性蔑視的な女性観や、戦後すぐに日本政府が「特殊慰安施設協会」の設立に担加しているのを見ると、韓国の慰安婦問題も事実としてあったと思う。戦争の男性性、暴力性の問題など若手フェミニストの問題意識を取り上げる雑誌があってもよかったです。秦さんや中村さんの「遊廓」での「商行為」として「視する感覚には多くの女性に納得しないでしょう。」

橋爪大三郎さん 日本人がこの前の戦争をきちんと述べる言葉が失われているという危機的な感じを受けました。戦後、ナショナリズムを前向きに語るものがタブーになり、戦争について語ることは自分の問題ではなく親たちや

対極化進む戦争責任問題



中西 輝政さん



橋爪大三郎さん



山下 悦子さん

軍部のマイナスの体験を他者の問題として語る儀式、つまり心の問題になってしまった。その裏には、日本がどのように戦争を引き起こし、遂行し、敗れていったのか、アジアで何をされたかを事実として知ろうとしなかったことがある。「正論」で中村さんが、慰安婦の政府調査は謝罪する方針が決まっています。事実を調べず形ばかりの報告書を出したと述べていますが、結局、事実関係を知らないで済ませている姿勢

でも、当事者でないからと言って戦争

ると、妄言政治家も告発型日本人も同じだと思ふ。現象的には二項対立に見えるが、根は全く同じです。

橋爪 「文藝春秋」で山崎さんがウル中央駅で地元の人々と語り合った話をしていますが、同じ戦争を経験した他国の人々の生の声を聞き、その人々の耳にも届く形で言葉にしようという態度に好感を持ちました。今の日本人の大部分は戦争の当事者ではない。従軍慰安婦問題は日本の若い世代が大

まものは避け、野菜も火を通してから口にできるようにしている。今まで無関心だった120度2秒間、14(両者ともサンサーラ)0度2秒間と記された牛乳パックの殺菌表示も気にしている。買い控えるの心理に私も陥ってしまった。

にっけ、日本本来の食生活

そんな折、「緑茶のカチキン」に殺菌作用、0-157が失われ、「腸」の働きが弱くなったこと、抗生物質など薬剤を過剰投与してきたこと、今回の大流行と無関係ではないというのだ。

なるほど安全性に気を配り始めてからのわが家の食卓は食物繊維を含んだ野菜の煮物、煮魚、焼き魚、熱々

責任がないと思えばとんでもない勘違いです。戦争当事者でなくても戦争責任があることになるのが国家であり、国民であり、社会が継続しているということなのです。

山下 議論が男性中心に語られていることに不満を持ちました。小林さんの従軍慰安婦問題に対する考え方にも男性的な視点があり、慰安所と一般の性的な戦争暴力を一緒に語ってしまうのは納得できません。むしろ従軍慰安

責任がないと思えばとんでもない勘違いです。戦争当事者でなくても戦争責任があることになるのが国家であり、国民であり、社会が継続しているということなのです。

山下 議論が男性中心に語られていることに不満を持ちました。小林さんの従軍慰安婦問題に対する考え方にも男性的な視点があり、慰安所と一般の性的な戦争暴力を一緒に語ってしまうのは納得できません。むしろ従軍慰安

◆ 私のお勧め 2点 ◆

(注記した以外の月刊誌はすべて9月号)

中西	①特集「歴史分析・NY株大暴落」 ②アメリカニズムにとられたアジア論	エコノミスト 8/13・20 原洋之介 発言者	①タブーの話題だが、今や真の危機管理のために ②現代日本の奇妙によそよそしいアジア論の背景
山下	①特集「世代間大戦争」 ②チェルノブイリで小児ガンを治療する	エコノミスト 8/6 菅谷昭 中央公論	①社会と家計の55年体制の崩壊による21世紀像 ②原発事故から10年、甲状腺がんの子供たちの実情
橋爪	①がん終末期医療をどうすべきか ②環太平洋文明の誕生	柳田邦男、近藤誠諸君! 山崎正和 中央公論	①統「がんと闘うな」。斎藤建の批判(文藝春秋)も ②共通の文明基盤を持たないアジア諸国の前途は多難

◆ 読む・ガイド ◆

特集 「あいまいな50年」からの訣別	梶村太一郎、田中伸尚ほか 世界	日本は敗戦を精神的に克服する戦いにも敗れた(梶村)
「日本のつぐない」大論争	秦郁彦、山崎朋子ほか 文藝春秋	慰安婦の「強制」があったかをめぐる秦VS山崎・高木
太平洋戦争は終わっていない	東郷茂彦 文藝春秋	米紙記者の経験から感じた日米戦争観の絶望的隔たり
慰安婦問題に潜む虚偽	中村黎 正論	慰安婦は「商行為」。政府見解は虚偽であり自己欺瞞
特集 戦後51年 ますます強まる戦争責任否定現象	新井利男ほか 週刊金曜日 8/9	「民間賠償」を求める活動に中国政府は抑制的(新井)
汚辱の近現代史—文部省検定済み歴史教科書批判—	藤岡信勝 サンサーラ	中学校教科書は暗黒・自虐・反日史観のオンパレード
「慰安婦」問題のこれから	吉見義明 軍縮問題資料	アジアとの信頼関係を築くため、まず政府資料開示を
特集 日本人とナショナリズム	AERA 8/19~26	経済的合理性を失ってもナショナリズムは消滅しない
従軍慰安婦カマトトマスコミを撃つ	小林よしのり SAPIO/28・9/4	証言には「証拠」がある、と「新・ゴーマニズム宣言」
マードック上陸と平和ボケ	井沢元彦 THIS IS 読売	無防備な日本にとりインパクトの強さは「黒船」に匹敵
メディア王・マードックの「デジタルな企て」	岡村黎明 潮	ソフトの供給こそデジタル放送時代の重要な鍵になる
アメリカの勝者が日本を系列化する	大前研一 サンサーラ	本命はまだ。やがて米メディアウォーズの勝者が来る
テレビ朝日株買収の知られざる衝撃	Foresight No.7	海外進出はリスクかチャンスか、選択を迫られた民放
特集 「在日」ルネサンス	黄民基、姜信子、許永中他 Ronza	差別意識が薄まり「実力」を問われた二世、三世
座談会 ベスト・セラーを論ず '96上期	橋爪大三郎ほか 論争 東洋経済	知の意匠をまとった「科学的」な技法の書が目立った

自由帳

病原性大腸菌O157が日本列島をパニックに陥れている。1980年代後半のバブル時代にさんさんドルををし、大衆消費社会の「飽食の時代」を賣ってきたつけが回ってきたのか、今、私達は安心して食べられるものがないという精神的飢餓感に苛まれている。近代的な国の安全な「食生活」といった神話がまたひとつ崩壊したよう

二人の子供を抱えるわが家では、疑わしき食物や57禍は現代文明に対する

「腸」の働きが弱くなったこと、抗生物質など薬剤を過剰投与してきたこと、今回の大流行と無関係ではないというのだ。

なるほど安全性に気を配り始めてからのわが家の食卓は食物繊維を含んだ野菜の煮物、煮魚、焼き魚、熱々

そんな折、「緑茶のカチキン」に殺菌作用、0-157が失われ、「腸」の働きが弱くなったこと、抗生物質など薬剤を過剰投与してきたこと、今回の大流行と無関係ではないというのだ。

なるほど安全性に気を配り始めてからのわが家の食卓は食物繊維を含んだ野菜の煮物、煮魚、焼き魚、熱々

雑誌を読む

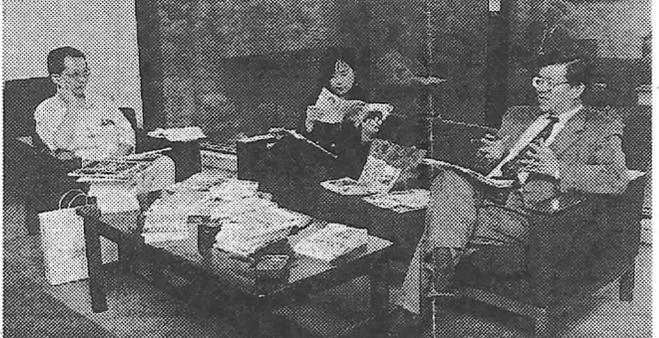
9月

橋川大三郎さん 住民投票が民主主義を押し進めるものなのか、それとも...

中西輝政さん 「サンサーラ」の岡崎久彦さんの「民意が国益を損ねる...

山下悦子さん 住民投票をイデオロギイ的に頭ごなしに否定する論調が...

是非「交錯する住民投票



意見を交わす(右から)中西輝政、山下悦子、橋川大三郎の3氏(本社で17日)

治、代議制に根本的な行き詰まりがあるのに、単に住民投票に対するネガティブな議論だけで終始するのは、危機感が乏しい気がします。

尖閣問題への冷静さ

静な態度をとれることは大変な勇気である。領土問題で冷静な態度をとれることは大変な勇気である。

自由帳

尖閣諸島をめぐる東アジアに大きな「感情の嵐」が巻き起こっている。幸い、(このまゝ)日本では、0157や沖縄基地問題、そして9月に入ってからは解散・総選挙という国内政局に世論の関心が集中しているため、今回の問題がそれほど大きな関心の対象とはならない。

き詰まり打開の糸口として直接民主主義に訴えるのは危険であるとする立場から書かれています。沖縄の問題を独自に解決して「ハイウェイ」として、沖縄の自立性や独自性を援助する形での経済特区を作っていくこと、これは本田さんのアイディアはいい。

Table with 3 columns: Author (橋川, 中西, 山下), Title, and Content. Includes '私のお勧め 2点' and '読む・ガイド'.

Table with 3 columns: Author, Title, and Content. Continuation of '読む・ガイド' section.

◆私のお勧め2点◆

(注記した以外の月刊誌はすべて11月号)

<p>橋爪大三郎</p> <p>①虚妄の中国経済大国論 (渡辺利夫) —中央公論 統一市場の未熟な中国経済は、また「超大国」にほど近い</p> <p>②死ぬ前に一度あなたに会いたかった (淀川長治、北野武) —文藝春秋 黒澤を除けば日本ベストワン、淀長さんがタケシにほれた</p>	<p>山下悦子</p> <p>①特集 市民による日本環境報告 —世界 ダイオキシン汚染など市民生活の傍らで進行する環境破壊を詳細に報告</p> <p>②父と私の「チャタレイ夫人」(伊藤礼) —文藝春秋 新潮文庫版伊藤整訳「チャタレイ夫人の恋人」の改訂作業を行うことになった息子の秘話</p>	<p>中西輝政</p> <p>①鼎談 二十一世紀の花鳥風月 (石川九揚、松井孝典、横山俊夫) —中央公論 鋭い感性による深みのある近代と21世紀論</p> <p>②「哲学」が消えた京都大学 (武田徹) —ボイス 官主導の大学改革と学問のあり方を問う</p>	<p>編集部</p> <p>①大特集 日本の力量を知る (椎名素夫、山内昌之、養老孟司ほか) —アステイオン秋号 健全なく愛国心>は国際人として不可欠の条件(山内)など、日本の「居場所」を分析</p> <p>②特集 翻訳と日本文化 (芳賀徹監修、D・キーン、村上春樹ほか) —国際交流73号 日本の文化史上、重要な役割を果たしてきた翻訳の歴史を多様な角度からひもとく</p>
--	---	--	--

雑誌を読む 10月

- 行政改革**
- ◆検証JR10年 公共性はどこへ行ったか (立山学) —世界
国鉄分割民営化から来年4月で満10年。20兆円以上の債務が整理されず残された処理政策の決算を問う
 - ◆日本国の研究 (猪瀬直樹) —文藝春秋
400兆円を超えて膨らみ続ける国の借金。現場のルポを通し行政システムの病弊に迫る集中連載第1部
 - ◆対論 大蔵官僚をいまずぐ駆逐せよ (野中広務、佐高信) —諸君!
思い上がった大蔵官僚に自浄作用はない。銀行・証券局を切り離し金融監視委員会を作れ、などを提案
 - ◆なぜ行政改革か 経済の「五五年体制」を打破せよ (橋本寿朗) —エコノミスト10/22
20世紀型産業構造に対応した公共事業は使命を終えた。行政機構を改革し21世紀型インフラ整備が必要
 - ◆霞が関で台頭し始めた「行政改革」推進論 (生田忠秀) —フォーサイトNo.10
霞が関の官僚自身から改革を歓迎する意見が出始めたが、政治による大蔵省の金融行政改革が突破口だ

山下 新旧価値観の闘争続く

橋爪大三郎さん 行政改革という問題の大きさがひしひしと伝わってきた。特に、猪瀬直樹さんの「日本国の研究」(文藝春秋)は、林野行政や水資源行政を調査し、国債乱発による浪費の実態を鋭くえぐっています。国鉄の債務問題を取り上げたのが世界立山学さんの「検証JR10年」公共性はどこへ行ったか、大蔵行政の問題を取り上げたのが「選抜10月号」の「中小銀行の大半は『隠れ破綻』」、「フォーサイトNo.10」の「霞が関で台



橋爪大三郎さん



山下悦子さん

規制緩和をやらないと外資は逃げる、やると票が逃げていってしまうこと、振り子」を振る。そういう戦いが見えているわけで、行政改革をどう進めるかという方法論がもつとあっている。山下悦子さん 佐高さんの論議文が目立ちました。「諸君」『玉石』に加えて「エコノミスト10/22」の「解大蔵官僚の批判を私権も交えて語っています。岡本行夫さんが「日本を苦しめる3つの『行きすぎ』」(ニューズウィーク10/23)で指摘しているように、官僚のあり方がバッシングではなく改革されないと大変なことになる。すべての権力が大蔵省に集中しているのは異常な事態です。税制改革については、橋本寿朗さんが「なぜ行政改革か 経済の『五五年体制』を打破せよ」(エコノミスト10/22)で、21世紀型経済社会システムをどう構築するかというグローバルな問題意識が必要だと述べています。

中西輝政さん 「だれも反対しないが少しも進まない」のが90年代の改革に共通した現象です。その背後にあるのは、票の問題、政治の問題です。行政改革を進めれば、必ず行政サービスは低下する。すると、改革を推進した政党は選挙で必ず負ける。諸外国もそうです。「民主制は改革を阻む」という現代政治に内在する論理をどう乗り越えるかが行政改革の大きなテーマです。その点の議論がなかったのは寂しい。橋爪さん 財政の問題は重要で、危機は危機として認識し賢明に振る舞わなければならない。大蔵省のリーダーシップが失われつつあるのは、いくつかの論文が指摘する通りですが、その原因は、80年代までのように日本経済が安定成長を続けた時代はもう終わったからです。改革を必要とする度合いは一日と深まっています。

中西さん 「ポスト高度成長」といわれる社会の脱力感が改革を阻んでいる。日本の土壌に適した行政改革とは何なのか。明治以来これだけ「官」主導でやってきたものが、安易にアングロサクソン型の「民」主導社会に変わるようなイメージを振りまく議論はやめなければなりません。歴史と土壌を踏まえた改革の戦略論が必要です。山下さん 失望感が強くあります。家族や経済、政治、教育などあらゆる場面で21世紀システムに転換しなくてはいけいのに、一向に改革が進まない。岡本さんは「国民、特に若年層における政治への無関心は危険な傾向だ」としていますが、総選挙の投票率は最低でした。高木勝さんが消費税率アップについて「潮」で「総選挙の争点として国民の信を問うべき」としていました(行革なき「消費税率5%」に異議あり)が、結局、自民党が議席を回復し、受け入れられてしまった。



中西輝政さん

橋爪 国会が主導権握るべきだ

橋爪さん 選挙の結果は、国民が自民党を中心とする連立政権を作れ」と考えたと解釈できる。この政権は改革に熱心でなさそうだから、矛盾は深まって、次の総選挙はさらに厳しい状態でもらざるを得ない。そこで自民党ではだめだと有権者が判断すれば改革志向の政権ができるわけで、余地は残っている。何回も選挙をすればいい。そのうちに行政改革のタイミングは必ず来ると思っていればいいか。

中西さん なせ、それがこれまでできなかったかという、国会議員の集票マシンの中に、大蔵省に代表される予算構造の恩恵を受けている土建業界などがあることが大きい。今回の選挙でも下板選挙、利権の選挙という日本型選挙は変わらなかった。民主党に風がそれほと吹かなかったのは、利権の構造で行われている選挙を完全に排除したところにある。汚いところに入らないと改革は始まらない。

……

△はしづめ、たいさぶろう 東京工業大学教授(社会学)

△なかにし、てるまさ 京都大学教授(国際政治学)

△やました、えつこ 女性史研究者

自由帳

オーストラリアに一週間ほど出張した。同国では、労働党から自由党に政権が交替し、政治の風向きが変わりつつあるところだった。緊縮財政で福祉や大学の予算は大幅カット。9月にはボーン・ハンセンという新人女性議員が「アジア人の移民は自分の国に帰れ、福祉にこれ以上税金を使わない」

と国会で演説し、マスコミが大騒ぎした。ときに行き過ぎはあっても、特定のテーマをめぐる国民が賛否をこぞ議論するところ、政治のメロハリに好感が持たれた。

メルボルン(オーストラリア)で、折からテレビは、隣国ニュージーランドの総選挙を報じていた。ここでは逆に、行革を徹底的にやりとげ経済を立て直した国民党が過半数を割り、ニュージランド・ファ

「あいまいな日本」の選挙

現地の人びとに最近の日本の政局について話した。なかなかわかってもらえない。特に、自民党の選挙戦略をめぐって、国民にわかりにくい点は、自民党が新進党と同じ状態になることをあてにしていた、最初から「第三極」をうらんだ。戦略が後回しのあいまいな存在で、国民にわかりにくい点は、自民党が新進党と同じで、結果的に連立の鍵を握った。いっぽうの民主党は、自民に政権が移る。それが容易なのが小選挙区の利点だ。敗れた今こそ政策を練り、時機を待てる。思い切った党内改革をやりとげる。野党の責は、任は重大なのである。

(橋爪大三郎)

◆私のお勧め2点◆

(注記した以外の月刊誌はすべて12月号)

橋爪大三郎	中西 輝政	山下 悦子	編集部
<p>①座談会 持続不可能な発展からの転換を(石弘之、A・L・ハモンド、朱建栄) =世界アジアの経済成長が無秩序に続けば、地球環境に大打撃。他にアジア環境特集の4論文も</p> <p>②「米日関係」の本当の実態を語れ(副島隆彦) =正論</p> <p>「日本はアメリカの属国」と考えれば、外交や経済の混迷を明快に説明できる。前号の続編</p>	<p>①今でも5年遅れでアメリカを追う日本(嶋中雄二) =エコノミスト11/12</p> <p>いよいよ米経済が下降局面に、日本は上昇へ。この逆調に目を向ける要あり</p> <p>②日本人が忘れたもう一つの教養(白川静、宮城谷昌光) =文藝春秋</p> <p>21世紀になると強く求められる文化のルーツへの視線の一つのあり方を示す</p>	<p>①藤子・F・不二雄との五十年(藤子不二雄A) =中央公論</p> <p>急逝した「ドラえもん」の作者への心温まる追悼エッセー。50年の交友の深みを感じる</p> <p>②異常ブーム「こんな日本に住み飽きた！」 =サビオ11/27</p> <p>夢を失った日本人が海外へ移住する現象が起きている。海外移住ブームの背景を探る</p>	<p>①特集 クリントン政権2期目に何が起きる(岡本行夫、宇佐美滋ほか) =世界週報11/26</p> <p>米中関係がヤマ場。日本は経済で対米、対アジアの相互の関連に考慮が必要(岡本)など</p> <p>②対談 '96総括 清潔日本にセットされた体内「悪」(芹沢俊介、山崎哲) =サンサーラ</p> <p>一足早い'96年の総括。伊達引退から自殺予告までの社会現象から日本人の意識を読み解く</p>

雑誌を読む

11月

政党とは何か

- ◆対談 何のための行革なのか (G・カーティス、佐々木毅) =中央公論
日本には政策的なマンデイトがない(カーティス)
- ◆自民党よ 驕るなかれ(後藤田正晴) =文藝春秋
試行錯誤は続く。1回の選挙結果に振り回されるな
- ◆菅直人 過去からの声(塩田潮) =同
権力を追い求めるマキャベリストという意外な実像
- ◆政治家「対抗軸」で政界再編を読む(櫻田淳) =諸君!
「中核」「周辺」の二つの機能を軸に政治家を位置付け
- ◆政治なき国家に迫る「アジアの武力」(石川好) =現代
「第三の黒船」が来なければ国民の意識変革はない
- ◆座談会 「社会党的なもの」の行方(新川敏光、新藤宗幸、米原謙) =世界
理想実現への現実的ステップのなさが限界に(米原)

中西 改革第2期が始動

中西輝政さん 今回の総選挙について、ネガティブな視点からの評論が多かった。中央公論の佐々木毅さんと対談「何のための行革なのか」でG・カーティスさんは、国会の改革の重要性が忘れられていると指摘している。議院制民主主義が十分機能しないところで、唯一の支えであった議院が壊れてしまつて国の運営をどうするかという点です。「文藝春秋」の後藤田正晴さんの「自民党よ、驕るなかれ」は、1回の選挙で結論を出した

治家を取り上げられた。事情通が選挙の裏側などを報じるタイプでは、例えば新進党の分党劇の舞台裏を紹介したものがありました。不満に思つたのは、政治はこうあるべきかという原則論を踏まえた論文がほとんど見当たらないこと。その意味で、後藤田さんのものには射程の長さを感じました。また、櫻田さんは、政治の中心的な課題

と周知的な課題とを軸に政治家を分けています。政党間人が大きく入れ替わり政党のアイデンティティが問われている時に、一つの見方を提示したのは良かった。赤坂太郎さんの「自民に渡った新進党28人リスト」(文藝春秋)で、「チョベリ・ド」選挙という言葉が印象に残りました。小選挙区制にしたに前よりひどいドブ板も選挙をやらなくとも結論を出すのは早い。小沢さんの二大政党論は、組織票という古い政治手法で改革を行おうとしているところに最大の矛盾がある。

中西さん 米大統領選でも49%という低い投票率になったことなど、世界的に近代民主主義が役割不適合症に陥っている。カーティスさんが言っているように、NPOやNGOの活動が活発になって、国会改革や政治改革もこれを視野に入れる必要がある。山下さん 「世界」の座談会でも新川さんが指摘しているように、結局、社会党は環境問題やフェミニズムなどの勢力を取り込むことができなかった。そこに、21世紀的な民主主義、ネットワークを作っていくニーズが含まれています。菅直人的なものが支持されるのは、権力を持つ一つの戦略として利用していく感性を持っている点です。中西さん 菅直人は二番、三番せんじを狙うデマゴギー現象につなが



山下悦子さん



中西輝政さん



橋爪大三郎さん

菅氏の感性に支持

橋爪「争点消し」をやめよ

です。二大政党制も、本当には有権者が求めているのかという点から議論し直す必要がある。「ニューズウィーク」11/13は、投票率の高い国で棄権した場合の罰則を設けていることを紹介しています。有権者の無関心は先進国病が、そういう制度を日本で取るのか。

橋爪さん 今回の選挙は争点がはっきりしなかったと多くの論文が指摘しています。「争点を消す」とか「自己主張を隠して仲間を増やし多数派を形成する」という政治技法をやめない限り、政党の姿はあいまいとなるばかりです。カーティスさんは、日本では政治家が有権者の話を聞くことが望ましくないとされてきたと指摘しています。橋爪さん 菅直人も他の新しいリーダーも、行政改革について国民の意見抜きに理想を実現しようとするかちになって、有権者の意見を聞いて回るところから出発するのがよいのではないかと

危険性も持つ。政治家がデマゴギー的にならずに、しかも国民のニーズに根差したリーダーシップを発揮していく。この一線はつねに微妙です。

山下さん 今回の有権者は大衆消費社会の中でトレーニングされ、確かなものを見極める力はつけていると思う。橋爪さん 菅直人のケースのようなスター性は悪いことではない。失敗した場合、たちまち批判にさらされるのですから。

中西さん ただ、そこにはシステムとリスクがある。政治改革がうまくいくためには、個人人気でなく制度的なものに定着しなければなりません。

▽なかにし てるまさ 京都大学教授(国際政治学)

▽はしづめ だいさぶろう 東京工業大学教授(社会学)

▽やました えつこ 女性史研究者

自由帳

生命に巣くう欲望と権力

「開成高校生殺人事件」「97年」「祖母殺し高校生自殺事件」「79年」「金生自決事件」(80年)と名門高校生が主役となった事件のうち、初めの二つの事件を詳細に追った本多勝一編「子供たちの復讐」(朝日文庫)を読み返している。

「家庭内暴力も自殺も登校拒否も確実に増大しつつある」

子から親への立場の変化は、20年近い歳月をまたいで感じさせない内容となっている。その頃、大学生だった私は、中学生の娘と息子を持つ親になった。

殺事件、中・高校生による傷害事件、覚醒剤所持で逮捕等々は新聞紙面の「定番」になってしまった。また教師による生徒の体罰事件は過去最悪の増大ぶりを示した。女子高校生を

生息子を金属バットで殺害した事件があったが、わが子と同年齢の子供がそのようになっている。命のなす方をしていくことに、深い哀しみを感じざるをえない。いじめによる自殺事件、中・高校生による傷害事件、覚醒剤所持で逮捕等々は新聞紙面の「定番」になってしまった。また教師による生徒の体罰事件は過去最悪の増大ぶりを示した。女子高校生を

殺事件、中・高校生による傷害事件、覚醒剤所持で逮捕等々は新聞紙面の「定番」になってしまった。また教師による生徒の体罰事件は過去最悪の増大ぶりを示した。女子高校生を

コラム「電脳文化的今日は、25日に掲載します。」

◆私のお勧め2点◆

(注記した以外の月刊誌はすべて1月号)

<p>橋爪大三郎</p> <p>●中沢新一「レーニン礼賛」の驚くべき虚構(岩上安身) —諸君! 人間否定のレーニン主義が、スターリンやオウムを生んだと、中沢氏のレーニン像を批判</p> <p>●日本国の研究Ⅲ「寄生の帝国」 —公益法人の蜜の味(猪瀬直樹) —文藝春秋 詳細な資料により、郵政、運輸関連の公益法人が税金・公的資金を食い物にする実態を解明</p>	<p>山下悦子</p> <p>●教育批判論序説⑥ そのために死にうる「国家」(桂秀実) —発言者 「保守派が『女は二流市民』と公言できない限り、フェミニズム=市民主義は敗北しない」</p> <p>●自殺予告 子供は脅迫者か被害者か(奥野修司) —文藝春秋 自殺予告を受け行事を中止した学校の取材を通し、現在の中学生の「死生観」に迫る</p>	<p>中西輝政</p> <p>●モデルになった韓国経済(渡辺利夫) —ボイス 韓国の発展にみられた成長と民主化モデルの全アジア的重要性を論じる</p> <p>●21世紀のアジア —海からの祝慶(船橋洋一、濱下武志) —中央公論 濱下氏の歴史に根ざす中国観と壮大な文明的観点から論じ、「ボイス」の特集「2</p>	<p>編集部</p> <p>●内部告発のすすめ(加藤尚武) —論座 企業組織が生み出す大規模犯罪を未然に防ぐための内部告発の条件を倫理的に検証する</p> <p>●死神が遠のいた? —ニュースウィーク12/11 エイズ新薬による奇跡的な回復例を紹介。治療法の最前線と課題を分かりやすくレポート</p>
---	--	---	--

雑誌を読む

—12月—

- ### 「21世紀」論
- ◆特集 21世紀への日本の覚悟 (井上ひさし、田中澄江、竹内靖雄、曾野綾子) —文藝春秋 自己本位を確立することが国際化の第一歩(井上)
 - ◆心の羅針盤を失った日本人 (石原慎太郎) —文藝春秋 敗戦で価値の基軸を失い過剰に個を主張する日本人
 - ◆相対化の時代 —市民の世紀をめざして(坂本義和) —世界 冷戦終結後の平和主義と「市民社会」のあり方を探る
 - ◆日本「言論人」地図 (櫻田淳、宮崎哲弥、八木秀次) —諸君! 共同体か個人か、国益か民意かの両軸で論争を整理
 - ◆「改革論」というイデオロギー (佐伯啓思) —正論 改革の個別論点が思想的問題に置き換えられる危険
 - ◆特集 2001年の高度成長 (牛尾治朗、吉富勝ほか) —ボイス 「一国主義」を乗り越える構造改革が発展の道(牛尾)

山下 前向きな市民社会論

橋爪大三郎さん 21世紀に焦点を当てた論文で、多くの論者が「日本という国は価値観、行動基準を喪失しつつある」という切実な空無感を共有していると感じました。石原慎太郎さんの「心の羅針盤を失った日本人」(文藝春秋)には、個人的経験を踏まえ、そういう心情がうつらわれていました。そうした中で、「世界の船橋洋一さんの『アジア・太平洋の21世紀戦略』、日米中の関係をどう構想するかという観点から論じ、「ボイス」の特集「2



山下悦子さん



中西輝政さん



橋爪大三郎さん

中西 目立つ議論の二層性

象徴的に現した論文という感じがしました。また、混迷している21世紀の選択の議論の中で面白い試みを提示したのが、「諸君」の「日本「言論人」地図」(櫻田淳、宮崎哲弥、八木秀次)です。佐伯啓思さんの「改革論」というイデオロギー(正論)は、規制緩和など改革論の個々のイシューには反対しながら、それが思想的に議論

橋爪 現実動かす回路必要

の指摘に典型的なように、敗戦時に日本人が何かを失い、日本が方向感覚を喪失したという感じは、国際関係において対処の方法を持たず、国内の構造改革について処方せんがなく、歴史についても受け止めるでもなく否定するでもない……という図柄でみんな結び付いている。特に今年は、従軍慰安婦問題などで歴史がトラウマのように再び私たちにどう見え、混乱させた年だったと思います。「言論人」地図で自分のポジションを取りあわせているのは、言論界で生き延びてはいるけれど、日本全体をリードする言論者ではそれが提起しているのかというものが感じられた。世代論はあつたが、それを乗り越えてどうつながり連帯感なしの議論では前進できない。

橋爪さん 私は希望もあると考えたい。現実を動かすのは政府の行動であり、政治です。それには議論が先行しているはずだ。それを、審議会などではなく、総合雑誌という場で明らかにし、論争することで国民が求めて現されればよいのです。そうすれば雑誌もまじめに読まれる。

……

▽はじつめ、だいさつう 東京工業大学教授(社会学)

▽なかにし、てるまさ 京都大学教授(国際政治学)

▽やました、えつこ 女性学研究者

001年の高度成長で牛尾治朗さんは、日本経済の行き詰まりを構造改革で乗り越える方法を論じて示しています(取り残される日本経済)。京セラ会長の稲盛和夫さんは「日米21世紀委員会」設立の願い(ボイス)で、日米関係の悪化を心配し、真容本質のある米国に、日本の国益を言い立て感情的に反発するのは賢明でないと指摘しています。

中西輝政さん 印象に残ったのは、「世界」の坂本義和さんの「相対化の時代 —市民の世紀をめざして」です。冷戦後の世界情勢を論じ、同時に沖縄・安保やアジアとのかわりなどの政策問題についても語っている力こもった大論文です。相対化というコンセプトでまとめているのが「市民社会」の概念が西欧近代的な意味で21世紀に再生するかどうか可能性については、さらにもう少し突っ込んでほしい面もある。しかし、戦後日本を分断した国際政治に対する理想主義対現実主義という論争が歴史的なものになったことを

橋爪 現実動かす回路必要

の指摘に典型的なように、敗戦時に日本人が何かを失い、日本が方向感覚を喪失したという感じは、国際関係において対処の方法を持たず、国内の構造改革について処方せんがなく、歴史についても受け止めるでもなく否定するでもない……という図柄でみんな結び付いている。特に今年は、従軍慰安婦問題などで歴史がトラウマのように再び私たちにどう見え、混乱させた年だったと思います。「言論人」地図で自分のポジションを取りあわせているのは、言論界で生き延びてはいるけれど、日本全体をリードする言論者ではそれが提起しているのかというものが感じられた。世代論はあつたが、それを乗り越えてどうつながり連帯感なしの議論では前進できない。

中西さん 「諸君」で宮崎さんらが指摘していますが、知識人と一般人は全然違う議論をしている。この二

この一年を振り返って、日本を取り巻く情勢の変化を考へてみると、何となく米中関係の劇的な変化の流れが印象的であった。台湾問題の浮上によって悪化した米中関係が、3月の台湾近海での軍事演習をめぐって、緊迫した場面にまで高まった。しかし7月以降、修復に転じた米中両国の動きは、日本人には意外なほど急速かつダイナミック

米中関係と日本の成熟

この一年、日本が見たように「感度」が良すぎるのは問題なのである。中国にしては、日本との関係が多少なりとも悪くなっても、対米関係がどうなるかは日本はどのように折り合わせたか、成熟した哲学を振る舞いが求められ始めた。(中西輝政)

自由帳

この一年を振り返って、日本を取り巻く情勢の変化を考へてみると、何となく米中関係の劇的な変化の流れが印象的であった。台湾問題の浮上によって悪化した米中関係が、3月の台湾近海での軍事演習をめぐって、緊迫した場面にまで高まった。しかし7月以降、修復に転じた米中両国の動きは、日本人には意外なほど急速かつダイナミック

米中関係と日本の成熟

この一年、日本が見たように「感度」が良すぎるのは問題なのである。中国にしては、日本との関係が多少なりとも悪くなっても、対米関係がどうなるかは日本はどのように折り合わせたか、成熟した哲学を振る舞いが求められ始めた。(中西輝政)

あいまいな責任追及

いじめ問題の行方

山下 実際には二人の子供を持つ身としてビックリしたのですが、この経済状況が厳しいにますます親たちの私立学校志向が高まっています。そこには公立学校でのいじめの不安や、カリキュラムや内申書制への不信がうずまいています。稲垣武さんの「公立校を全廃せよ」(サンサーラ)は、公教育に競争原理を導入して改革をしない限りの教育再生はないと指摘しています。たしかに当たっている部分がありますが、ただ私立化すればいじめが激減するというのは、楽観的にすぎます。

いじめについては同じパターンの子供たちの自殺が繰り返されていいますが、「エコノミスト」(2/20)の「敢闘言」で日垣隆さんは、ジャーナリズムの報道の影響が大きいのを指摘しています。つまり、いじめへの「復讐」として相手の実名入りの遺書を残すというパターンですね。また、自殺を美化するなどと訴える椎名誠さんの「ただただ言ひ死ねな」(文藝春秋)も面白く読みました。死ぬべらいたったらケンカすればいいのです。ケンカのハウツーを蓄積した子供の世界がすぐに崩壊しているわけですね。

中西 「HIS IS」

「いじめは世界的現象だ」は、先進各国にも似た現象があることを明らかにしています。また同じ特集の竹内洋さんの「軽やかな教育 大衆化の危うさ」は日本の大衆受験社会が「主体なき精神」を作り出しているといっています。確かにいじめをいじめ教育の諸問題は、単なる制度論やシステム論では覆いきれません。

橋川 竹内さんの議論は面白かった。現在の受験社会は、かつてのように立身出世のために勉強するのではなく、受験システムの中でプログラムをこなしていく人間類型「空虚な主体」を量産しているという指摘です。また、いじめが世界共通かという問題ですが、河合肇雄さんの「いじめと『内的権威』」(世界)は、思春期の子供がどうなる壁とれない日本の大人たちを問題にしています。

中西 いじめの日本の特徴は、「いじめられる方にも問題がある」という点です。それが、いじめをめぐる責任追及をあいまいにして、次々にいじめを生む。今

すぐ出来るいじめ対策は、教育の現場からという見方を一掃することですが、なぜその辺を問題にする論文がないのか。

橋川 なぜ「いじめられる方」原因がある」と考えしてしまうのかといえ、それは大人の社会に原因があります。集団の秩序に従わない人間を「問題あり」と見なす大人の社会の論理を子供の世界に投影すると、一人だけいじめられている子供にはそれなり原因がある、というところになってきます。また昔のような地域集団がなくなった今日では、家でも学校でも孤立した子は本当に追いつめられやすい構造になっている。そこで提案したいのは思春期のいじめ適齢期の子供が親元から離れ、別の家庭で過ごすという制度です。アメリカではオープン・ドアといって、ボランティアが他人の子を預かるシステムがあります。

山下 教育の大衆化で、だれもが大学へ行きたいといふことになれば、受験競争がどこまで激しくなるかは必然です。もはや首都圏ではクラスの半分が私立中学受験をしているという状況もつき、受からなかった子が受験しなかった子からいじめられるという

話もある。ここまで子供たちに無意味な競争を強いるのなら、やはり大学受験からシステム全体を変えた方がいい。

中西 今までもさんざん繰り返してきた大学入試システムは、もはや限界です。試験が簡単であるというところで、難しくすれば、卒業できる保証のない入試に意味がなくなり、中高教育のゆがみも受験競争もたまたま改善されます。

橋川 ニフトリが先かタマゴが先か、という問題ですね。中西 今後、そこそこの大学を出ても就職できなくなっていく中で、バブル的な大衆受験社会は終焉原則によって自己収縮せざるを得なくなっています。それにより争がどこまで激しくなるかは必然です。もはや首都圏ではクラスの半分が私立中学受験をしているという状況もつき、受からなかった子が受験しなかった子からいじめられるという

後書き

一兆円だの二兆円だのという金額はふつうの人にはとても実感の持たない数字でしょう。住宅金融専門会社(住専)問題をめぐって語られているものごとにはこうした金額だけではなく、私たちに借金と来ないことばかりです。借りた金はちゃんと返す。経営が行き詰まった会社は倒産する。そういう「ふつうのこと」が、「金融システムを守る」という「黄門の印籠」のもと、実現しないのですから。そして困ったこと、この「印籠」そのものがまたどうい実感できるものではないのです。しかし、金融にしても教育にしても、私たちの国のものももの仕組みに相当方々が来ていることには確かによります。「実感」だけを根拠にした感情論はやはり危ういものでしょう。「実感」を超えつつ、「実感」を逆なですることない、事実裏付けられた成熟した議論がいまこそ大切なこと、気がします。(於)

大震災から1年

山下 震災一年で、さまざまな特集が組まれています。『HIS IS』読売の「総力取材」

・東京直下大地震」は、まさに自分のこととして一生懸命読みました。なかでも目を引いたのは布野修司さんの「日本の都市 その死と再生」です。阪神・淡路大震災で最もダメージを受けたのは、高齢者、障害者ら社会的弱者だったわけで、日本社会がいかに階層的であったかがあらわになりました。ところが現在の復興計画はそれを是正する方向ではなく、この階層性を前提とし、その上で進められていると布野さんは指摘しています。復興計画に、震災の体験がまったく生かされていない。

橋川 被災地の声というところで「中央公論」の市山隆次さんの証言集「被災者たちの三六五日」がバランスよくまとまっています。一周年を機に、日ごろは震災を忘れがちな私たちに、被災地の実情をよりく伝えてくれます。ただ全体に、復興についての具体的な新しいアイデアが見あたらない。公共的プロジェクトはともかく、個人は自力で家を造り直すのはいかに行政のスタンスを

打ち破るような提案が欲しかった。

中西 私もし山さんの証言集を、共感しながら読みました。「世界」の特集「大震災・一年目の現実」でも分かりますが、肉親の死、何十人もの大量の死は、一年やそこらの年月では受け止めきれません。震災の証言で淡々と語られる「死」のイメージは、現代日本人のメンタリティーのどこかに沈潜して、その精神に微妙な影響を与えていくでしょう。私は、「ニューズウィーク」(1/17)のピーター・タスカさんの「日本人はどうリスクに立ち向かうか」という問いかけとオーバラップさせながら、これらを読みました。震災一年の節目には、復興をめぐる実際的な問題のみならず、文明論にまで及ぶ議論がもっとあってもよかったです。

山下 「文藝春秋」の「夕暮れが怖いな」は「震災ストレス」の小林和さんが心的外傷後ストレス障害(PTSD)に悩む方々の実情を報告しています。従来、日本では災害による心の傷について関心が寄せられなかったのです

が、心のケアへの取り組みの必要を説いて読ませるレポートです。さらに震災の子供たちへの影響を書いたものが少ないなか、ベネッセから出ている季刊「子どもと冬号」の「子どもたちの震災復興」の特集が、リサーチも行き届いて面白かった。監修の中村安秀さんは、二十一世紀の高齢化社会を担うことになる子供たちが、この震災の体験をどう語り継ぐかに注目しています。

橋川 「HIS IS」読売の東京地震の想定でなるほどと思ったのは、直下型地震では隣接する自治体でも被害状況がまったくと違つ可能性があるため、自治体相互の救援態勢が重要になることで。阪神大震災では初動救助の遅れが指摘されましたが、自治体の壁を超えて救助隊が必要な場所に投入できる仕組みを作らねばなりません。

中西 それにしても一年たつて「地震対策」が熱い議論の熱気から冷めてしまったところ、印象は否定できません。むしろ今こそ議論を煮詰めねばならぬのだ、メディアが関心を低くするのは、全体として問題です。

て各誌の特集をみて、国民や国会のマジエンタ(議題)となるような具体的な提案に欠けているという感じを受けます。

橋川 その通りです。とくにテレビの場合、大きな事件が起こると、同じような報道を繰り返したあげ、視聴率が落ちればサッと打ち切る。そのように事件を「消費」するのは、初動の救助態勢にせよ何にせよ、はつきり問題を提起し、それが十分な解決をみるまで粘り強く追いかけていく報道が必要ですが、こと震災対策では告発的な手法で世論や行政の注意を喚起してもよいと思えます。これだけの経験をして予備も出ないもの、有効な対策がとられないという、将来またまた「経験は生かされたのか」という議論をするのは、なっていないように感じます。

中西 私は告発型報道はセンセーショナルに墮しやすくて、ジャーナリズムの邪道と考えていますが、こと震災対策では告発的な手法で世論や行政の注意を喚起してもよいと思えます。これだけの経験をして予備も出ないもの、有効な対策がとられないという、将来またまた「経験は生かされたのか」という議論をするのは、なっていないように感じます。

「二月号」は、実際に今年になって初めて刊行された号になります。やはり新しい年が日本にとってどんな年になるのか」といった感じの問題意識の特集や論文が多いように、日本において「日本論」は消費財なのだと言った人がいます。日本人ほど「日本論」のたぐいが好きな国民はいないという指摘もよく聞きます。否定はあれ肯定であれ、自らの「ユニークな」をいつも自己確認しておきたいというところのなにかもありません。しかし「自家中毒」的「日本論」は、私たちが、やはりあります。この国の民人としてものを考えていかざるを得ないことも確かです。

書店の雑誌コーナーにはCD-ROMが入ったパソコン関係の雑誌が並び並んでいます。オビエオン雑誌は肩身が狭いようです。しかし、活字を通じて開ける世界は決して狭いものではないと思います。今年も月一回の本欄をぜひぜひ愛読ください。

中西 それにしても一年たつて「地震対策」が熱い議論の熱気から冷めてしまったところ、印象は否定できません。むしろ今こそ議論を煮詰めねばならぬのだ、メディアが関心を低くするのは、全体として問題です。

メディアの姿勢に注目

「いじめ問題の行方」は、先進各国にも似た現象があることを明らかにしています。また同じ特集の竹内洋さんの「軽やかな教育 大衆化の危うさ」は日本の大衆受験社会が「主体なき精神」を作り出しているといっています。確かにいじめをいじめ教育の諸問題は、単なる制度論やシステム論では覆いきれません。

橋川 竹内さんの議論は面白かった。現在の受験社会は、かつてのように立身出世のために勉強するのではなく、受験システムの中でプログラムをこなしていく人間類型「空虚な主体」を量産しているという指摘です。また、いじめが世界共通かという問題ですが、河合肇雄さんの「いじめと『内的権威』」(世界)は、思春期の子供がどうなる壁とれない日本の大人たちを問題にしています。

中西 いじめの日本の特徴は、「いじめられる方にも問題がある」という点です。それが、いじめをめぐる責任追及をあいまいにして、次々にいじめを生む。今

話もある。ここまで子供たちに無意味な競争を強いるのなら、やはり大学受験からシステム全体を変えた方がいい。

中西 今までもさんざん繰り返してきた大学入試システムは、もはや限界です。試験が簡単であるというところで、難しくすれば、卒業できる保証のない入試に意味がなくなり、中高教育のゆがみも受験競争もたまたま改善されます。

テレビ朝日株の買収

橋川 R・マードックが日本のベンチャー企業を組んでテレビ朝日の株を買収し、単独で筆頭株主になりました。日本では企業買収が少なく、放送法で外国企業は放送会社の株を20%以上取得できないことになっています。「常識」が崩れた衝撃があるわけですが、背景を説明したものは「Forseight」の「テレビ朝日株買収の知られざる衝撃」が分かりやすかった。通信衛星、ケーブルテレビ、インターネットなどメディア媒体が増えている中でソフトの不足が起きている。情報発信力のある企業を傘下に収める戦略を考える人が出てきてきた。今回は日本がこうした世界的なメディア状況のうちに巻き込まれた最初のケースです。日本の電波管理政策やメディアのあり方を再見すべきではないかという思いが起きます。

山下 二通りの受け止め方があるでしょう。岡村孝明さんの「メディア王・マードックの『デジタルな全』」(潮)や国内メディアの「黒船襲来」だと危機感を強調してきます。大前研一さんの「メディア・ウォーズ」アメリカの勝者が日本を系列化する(サンサー)は「黒船」説を否定して、この局も同じ内容のものを供給する「幕の内弁当」スタイルを脱皮して、デジタルマルチメディア開国への準備を進める方が大切だといっています。ただデジタル多チャンネル化されて外国のものが入り込んでくるという不安は、日本の文化といえども守らなければならないという思いが起きます。

中西 「潮」の岡本黎明さんの論文がもっともなバランスをとりつつあるように思いました。しかし、岡本さんを含めても「デジタル」の問題としてだけ取り上げ過ぎている点が気になります。外国企業の20%以上の株取得制限という市場経済に反する放送法の規定がなぜあるのか。メディアの問題は「デジタル」に始まるだけ。安全保障と同じ「デジタル」が対外独立性を保障するもので「デジタル」を持っていくのが大切なわけですね。情報安全保障や冷戦後の新世界秩序における情報のあるいは世界の国々を悩まして

後書き

テレビ朝日株買収に関する記事や論文に「コンテンツ」という言葉がよく出てきます。「正論」で植田康夫さんが注目して論じています(メディア電子化時代の黒船)が、「中身」「目次」といった意味の言葉が、ここでは伝えられる情報の内容、「ソフト」と同じような意味に使われています。植田さんは、ジャーナリズムから「コンテンツ」を指している

後書き

か。今月出ている論文は、そういう点を抜きにして技術的な面に傾斜しすぎている感じがします。

橋川 問題は結局日本から外に向けていかに発信していくかということだと思う。先ほどのNHKの前会長の島根次さんはGN(グローバル・ニュー・ネットワーク)構想を持っていたようですが、こうした前向きな議論が必要だと思います。

山下 NHKの「おひさし」が中国や東南アジアで熱狂的に迎えられたという話もありますが。

中西 「おひさし」は中国でも受け入れられず、アメリカ・ヨーロッパなど単発の分野だけではどうしようもない。

橋川 ソフトについては私は悲観的です。パソコンなどの基本ソフトは外国に支配されています。有能な才能を集めたベンチャー型の企業には期待したいのですが。

山下 幼少時からテスト勉強ばかりしている今の日本の教育システムなどを考えるなら、それも悲観的な感じがします。

論「情報・文化」の乏しい

「おひさし」は中国でも受け入れられず、アメリカ・ヨーロッパなど単発の分野だけではどうしようもない。

橋川 ソフトについては私は悲観的です。パソコンなどの基本ソフトは外国に支配されています。有能な才能を集めたベンチャー型の企業には期待したいのですが。

山下 幼少時からテスト勉強ばかりしている今の日本の教育システムなどを考えるなら、それも悲観的な感じがします。

W杯日韓共同開催

橋川 サッカーのW杯の日韓共催が決まり、関連のものがかかりあります。国際サッカー連盟(FIFA)は単なる利権集団に過ぎないという指摘が池田旭之助の「アジアに翻弄された日韓サッカー界」(RONZA)や「日韓共催に至る舞台裏を主題にしたもの」がいくつかありますが、W杯に対する日韓の視線の違いにかかわる論点の方がずっと大切です。韓国は日本よりはるかにW杯誘致に真剣だったし、盛り上がりがあった。それは対抗馬がほかにない日本だったため、多くの論文が使っている言葉でいえば「韓国の『反日』感情が、そこにある。一方の日本は従来の日韓関係の経緯もあって、韓国と争う事態を受け止めていた。韓国人の『反日』に対して日本人の『嫌韓』がいわれるわけですが、豊田有恒さんの「W杯共同開催で加速する『反日』」「正論」は日本人の「嫌韓」は韓国人の「反日」に比較できるようなものではない。「反日」は韓国躍進の原動力でさえあると指摘してきます。

後書き

先月テーマに取り上げた医療問題では、さまざまな論議が続いています。中でも、がん治療のあり方をめぐって反響を呼んでいる近藤誠氏の「闘うな」論に関しては賞否の議論が活発です。

がん専門医による文藝春秋の「検証」論文は、がん検診無用論を批判しながらも、「おむね国際的な常識に沿っている」として一種の「援護射撃」になってます。

また、サンデー毎日(7/28)やAERA(7/22)は、主として「がん」をめぐって理論に対する専門医の反論を掲載しています。

薬害エイズ問題や「安楽死」事件、さらにO157による食中毒事件などが相次ぎ、医療や健康への漠然とした不安感が広がっているように見えます。いざわが身に異常が起きた時、頼るべき医師、病院の信頼性が問われているわけで、それだけに「闘うな」論についても関係者による公開の場での、きちんとした討論が待たれます。(浩)

後書き

ものが多い気がしました。アトランタ五輪が開幕しましたが、A・シニヤンズさんの「秘密文書に見る五輪の裏側」(THESIS) 読後感がいかに素晴らしいか、現代のスポーツはショー化する一方でナショナリズム的な心情を醸成する方向に向かっている。「戦争の代替としての国家対抗スポーツ」という皮肉な言い方もありますが、2002年の日韓共催のW杯を、こういったものを超える契機として考える議論がせよという思いが起きます。

橋川 共催で日韓の相互理解が深まれば、ひょっとしたらコマで大笑いしむけですが、その条件があるかどうか、樂觀できないと思います。「中央公論」の小此木さんの対談では、池田さんは共催で日韓はもっと仲が悪くなる悲観論を述べている。「正論」の豊田論文なども指摘してきます。

が、20年ほど前までの韓国人の日本に対する感情は、日本統治時代のことを知っていた人も多々、日本の現実を見ずえた地に足のついたものだったけれど、最近の若き韓国人は日本にたいしてのイメージが、間接的な情報を通じて「反日」になってくる。その結果、世論調査でも「日本が嫌」という割合が10年に10%以上増加して

ている深刻な問題です。こうした視点のものはほとんどありませんでした。でも日本における国家性(の乏しさを)感じます。

橋川 日本の「情報開国」は放送法などの物理的な壁と日本語という言葉の壁によって守られていた。物理的な壁の方はインターネットや通信衛星で軽々と破られてしまったわけですが、言葉の壁のほうも簡単に破れそうにない。日本で起きたような急激な変化は起きないのではないのでしょうか。

中西 言葉の壁という点では、香港や中国華南におけるインターネットやインドから西の中東におけるBBCのワールドサービスなどの数年の動きをみれば、吹き替え技術が進んで、「07」の映画が、たまたま中国の雲南の山岳民族の言葉で放送された。そうすると一瞬にして言葉の壁を越えて、映画を見たこともない中国の人を「07」の世界に引き込んでしまっている。そのうちには、予想できない文化的なインパクトをロケットのように起すように思う。テレビ文化が進んだ日本にデジタル多チャンネル時代にアメリカ系の企業連合体がどう入り込むかという点も

か。今月出ている論文は、そういう点を抜きにして技術的な面に傾斜しすぎている感じがします。

橋川 問題は結局日本から外に向けていかに発信していくかということだと思う。先ほどのNHKの前会長の島根次さんはGN(グローバル・ニュー・ネットワーク)構想を持っていたようですが、こうした前向きな議論が必要だと思います。

山下 NHKの「おひさし」が中国や東南アジアで熱狂的に迎えられたという話もありますが。

中西 「おひさし」は中国でも受け入れられず、アメリカ・ヨーロッパなど単発の分野だけではどうしようもない。

橋川 ソフトについては私は悲観的です。パソコンなどの基本ソフトは外国に支配されています。有能な才能を集めたベンチャー型の企業には期待したいのですが。

山下 幼少時からテスト勉強ばかりしている今の日本の教育システムなどを考えるなら、それも悲観的な感じがします。

「感染症」の認識を

山田下さん 8月に亡くなった丸山眞男氏についての文章がかなりあります。久野収さんの「わが友丸山眞男の生と死」(週刊金曜日9/13)は身近な立場の人が書いたもので、全共闘批判についての私の丸山氏への「誤解」が正されました。最近、ポスト冷戦の現代と1930年代が対比されて語られることが多いのですが、その中で丸山氏の業績も見直されているように思います。私自身も「市民」という概念を問はず時に丸山氏が指摘した日本の特殊性をどう考えるかに興味があります。

橋爪さん 丸山氏を直接知っている人が書いたもの、書物を通して丸山氏に接している人の書いたもの、この間にギャップがあるのがおもしろかった。直接知っている人は当然、丸山氏を正確に知る。一方、丸山氏を正確に知る人が書いたものは、価値観を丸山氏の「丸山眞男とは何だったのか」「正論」です。政治思想家の面と一進歩的文化人としての面のうち、佐伯さん以後は前者に焦点をぼけて、丸山氏を厳しく批判しています。日本人として日本について論じながら、西欧の視点に自らを置き、日本の外部に立って丸山氏のことから、あるいは丸山氏が生まれたところの指摘で

現在アメリカで起きている日本社会の特殊性や無責任構造に対する攻撃は丸山氏がかつて言ったことと同じであるとも書いています。たまたま、私たちは丸山氏の問題設定からまた抜け出していないわけでは

中西さん 坪内祐三さんの「いまこそ問う 福田恆存か丸山眞男か」(諸君)、水谷三公さんの「持続する気分 丸山眞男と戦後啓蒙」(論座)、坂本多加雄さんの「丸山眞男と戦後知識人」(T H I S I S 読売10月号)などが、丸山氏のマルクス主義に対する微温的な態度にふれていきます。しかし、戦後ともかく30年代には、ファシズムに対するマルクス主義の陣営を含む人民戦線という考え方があった。第2次大戦を戦った「連合国」の論理です。冷戦構造がなくなった現在、旧連合国や丸山氏のマルクス主義に対するこうした態度も歴史に即して考え直すことができるわけでは、丸山氏の思想家としての評価は時間をかけて考える必要がある。

丸山氏が戦後日本で占めていた位置は強いといえば、フランスでサルトルが占めていた位置に似ている。冷戦構造の中でファシズムに反対する立場からリベラルはマルクス主義と手を携えるのが歴史的な必然といった感じがあったのでしよう。丸山氏自身は個人主義者で、マルクス主義のいやな面、奇妙な面をしっかりと見すえていたとしても、知識人・イデオログの立場においては市民的自由主義とマルクス主義は地続きだった。アメリカ的な自由主義からすると、日本的な容共リベラリストは考えられないわけで、形を変えた反米主義ではないかと警戒された。丸山氏は、こうした冷戦的状況で日本において代表する人としてしまえば、そのレッテルを丸山氏自身はがさきにはしなかった。

山田下さん 丸山氏は単なる西欧主義者ではなかったと思う。80年代以降、江戸時代が再評価されていますが、丸山氏も「市民」とか「近代的主体」を西欧モデルにして考えたのではなく、江戸期の研究をかなり行っていた。歴史意識の古層を明らかにして日本人の近代的主体的可能性を問うていっていたと思う。

中西さん 丸山氏自身は個人主義者で、マルクス主義のいやな面、奇妙な面をしっかりと見すえていたとしても、知識人・イデオログの立場においては市民的自由主義とマルクス主義は地続きだった。アメリカ的な自由主義からすると、日本的な容共リベラリストは考えられないわけで、形を変えた反米主義ではないかと警戒された。丸山氏は、こうした冷戦的状況で日本において代表する人としてしまえば、そのレッテルを丸山氏自身はがさきにはしなかった。

丸山氏が戦後日本で占めていた位置は強いといえば、フランスでサルトルが占めていた位置に似ている。冷戦構造の中でファシズムに反対する立場からリベラルはマルクス主義と手を携えるのが歴史的な必然といった感じがあったのでしよう。丸山氏自身は個人主義者で、マルクス主義のいやな面、奇妙な面をしっかりと見すえていたとしても、知識人・イデオログの立場においては市民的自由主義とマルクス主義は地続きだった。アメリカ的な自由主義からすると、日本的な容共リベラリストは考えられないわけで、形を変えた反米主義ではないかと警戒された。丸山氏は、こうした冷戦的状況で日本において代表する人としてしまえば、そのレッテルを丸山氏自身はがさきにはしなかった。

山田下さん 8月に亡くなった丸山眞男氏についての文章がかなりあります。久野収さんの「わが友丸山眞男の生と死」(週刊金曜日9/13)は身近な立場の人が書いたもので、全共闘批判についての私の丸山氏への「誤解」が正されました。最近、ポスト冷戦の現代と1930年代が対比されて語られることが多いのですが、その中で丸山氏の業績も見直されているように思います。私自身も「市民」という概念を問はず時に丸山氏が指摘した日本の特殊性をどう考えるかに興味があります。

橋爪さん 丸山氏を直接知っている人が書いたもの、書物を通して丸山氏に接している人の書いたもの、この間にギャップがあるのがおもしろかった。直接知っている人は当然、丸山氏を正確に知る。一方、丸山氏を正確に知る人が書いたものは、価値観を丸山氏の「丸山眞男とは何だったのか」「正論」です。政治思想家の面と一進歩的文化人としての面のうち、佐伯さん以後は前者に焦点をぼけて、丸山氏を厳しく批判しています。日本人として日本について論じながら、西欧の視点に自らを置き、日本の外部に立って丸山氏のことから、あるいは丸山氏が生まれたところの指摘で

現在アメリカで起きている日本社会の特殊性や無責任構造に対する攻撃は丸山氏がかつて言ったことと同じであるとも書いています。たまたま、私たちは丸山氏の問題設定からまた抜け出していないわけでは

中西さん 坪内祐三さんの「いまこそ問う 福田恆存か丸山眞男か」(諸君)、水谷三公さんの「持続する気分 丸山眞男と戦後啓蒙」(論座)、坂本多加雄さんの「丸山眞男と戦後知識人」(T H I S I S 読売10月号)などが、丸山氏のマルクス主義に対する微温的な態度にふれていきます。しかし、戦後ともかく30年代には、ファシズムに対するマルクス主義の陣営を含む人民戦線という考え方があった。第2次大戦を戦った「連合国」の論理です。冷戦構造がなくなった現在、旧連合国や丸山氏のマルクス主義に対するこうした態度も歴史に即して考え直すことができるわけでは、丸山氏の思想家としての評価は時間をかけて考える必要がある。

丸山氏が戦後日本で占めていた位置は強いといえば、フランスでサルトルが占めていた位置に似ている。冷戦構造の中でファシズムに反対する立場からリベラルはマルクス主義と手を携えるのが歴史的な必然といった感じがあったのでしよう。丸山氏自身は個人主義者で、マルクス主義のいやな面、奇妙な面をしっかりと見すえていたとしても、知識人・イデオログの立場においては市民的自由主義とマルクス主義は地続きだった。アメリカ的な自由主義からすると、日本的な容共リベラリストは考えられないわけで、形を変えた反米主義ではないかと警戒された。丸山氏は、こうした冷戦的状況で日本において代表する人としてしまえば、そのレッテルを丸山氏自身はがさきにはしなかった。

丸山氏が戦後日本で占めていた位置は強いといえば、フランスでサルトルが占めていた位置に似ている。冷戦構造の中でファシズムに反対する立場からリベラルはマルクス主義と手を携えるのが歴史的な必然といった感じがあったのでしよう。丸山氏自身は個人主義者で、マルクス主義のいやな面、奇妙な面をしっかりと見すえていたとしても、知識人・イデオログの立場においては市民的自由主義とマルクス主義は地続きだった。アメリカ的な自由主義からすると、日本的な容共リベラリストは考えられないわけで、形を変えた反米主義ではないかと警戒された。丸山氏は、こうした冷戦的状況で日本において代表する人としてしまえば、そのレッテルを丸山氏自身はがさきにはしなかった。

丸山氏が戦後日本で占めていた位置は強いといえば、フランスでサルトルが占めていた位置に似ている。冷戦構造の中でファシズムに反対する立場からリベラルはマルクス主義と手を携えるのが歴史的な必然といった感じがあったのでしよう。丸山氏自身は個人主義者で、マルクス主義のいやな面、奇妙な面をしっかりと見すえていたとしても、知識人・イデオログの立場においては市民的自由主義とマルクス主義は地続きだった。アメリカ的な自由主義からすると、日本的な容共リベラリストは考えられないわけで、形を変えた反米主義ではないかと警戒された。丸山氏は、こうした冷戦的状況で日本において代表する人としてしまえば、そのレッテルを丸山氏自身はがさきにはしなかった。

10157への視点

山田下さん 8月に亡くなった丸山眞男氏についての文章がかなりあります。久野収さんの「わが友丸山眞男の生と死」(週刊金曜日9/13)は身近な立場の人が書いたもので、全共闘批判についての私の丸山氏への「誤解」が正されました。最近、ポスト冷戦の現代と1930年代が対比されて語られることが多いのですが、その中で丸山氏の業績も見直されているように思います。私自身も「市民」という概念を問はず時に丸山氏が指摘した日本の特殊性をどう考えるかに興味があります。

評価と批判、改めて

山田下さん 8月に亡くなった丸山眞男氏についての文章がかなりあります。久野収さんの「わが友丸山眞男の生と死」(週刊金曜日9/13)は身近な立場の人が書いたもので、全共闘批判についての私の丸山氏への「誤解」が正されました。最近、ポスト冷戦の現代と1930年代が対比されて語られることが多いのですが、その中で丸山氏の業績も見直されているように思います。私自身も「市民」という概念を問はず時に丸山氏が指摘した日本の特殊性をどう考えるかに興味があります。

橋爪さん 丸山氏を直接知っている人が書いたもの、書物を通して丸山氏に接している人の書いたもの、この間にギャップがあるのがおもしろかった。直接知っている人は当然、丸山氏を正確に知る。一方、丸山氏を正確に知る人が書いたものは、価値観を丸山氏の「丸山眞男とは何だったのか」「正論」です。政治思想家の面と一進歩的文化人としての面のうち、佐伯さん以後は前者に焦点をぼけて、丸山氏を厳しく批判しています。日本人として日本について論じながら、西欧の視点に自らを置き、日本の外部に立って丸山氏のことから、あるいは丸山氏が生まれたところの指摘で

現在アメリカで起きている日本社会の特殊性や無責任構造に対する攻撃は丸山氏がかつて言ったことと同じであるとも書いています。たまたま、私たちは丸山氏の問題設定からまた抜け出していないわけでは

中西さん 坪内祐三さんの「いまこそ問う 福田恆存か丸山眞男か」(諸君)、水谷三公さんの「持続する気分 丸山眞男と戦後啓蒙」(論座)、坂本多加雄さんの「丸山眞男と戦後知識人」(T H I S I S 読売10月号)などが、丸山氏のマルクス主義に対する微温的な態度にふれていきます。しかし、戦後ともかく30年代には、ファシズムに対するマルクス主義の陣営を含む人民戦線という考え方があった。第2次大戦を戦った「連合国」の論理です。冷戦構造がなくなった現在、旧連合国や丸山氏のマルクス主義に対するこうした態度も歴史に即して考え直すことができるわけでは、丸山氏の思想家としての評価は時間をかけて考える必要がある。

丸山氏が戦後日本で占めていた位置は強いといえば、フランスでサルトルが占めていた位置に似ている。冷戦構造の中でファシズムに反対する立場からリベラルはマルクス主義と手を携えるのが歴史的な必然といった感じがあったのでしよう。丸山氏自身は個人主義者で、マルクス主義のいやな面、奇妙な面をしっかりと見すえていたとしても、知識人・イデオログの立場においては市民的自由主義とマルクス主義は地続きだった。アメリカ的な自由主義からすると、日本的な容共リベラリストは考えられないわけで、形を変えた反米主義ではないかと警戒された。丸山氏は、こうした冷戦的状況で日本において代表する人としてしまえば、そのレッテルを丸山氏自身はがさきにはしなかった。

丸山氏が戦後日本で占めていた位置は強いといえば、フランスでサルトルが占めていた位置に似ている。冷戦構造の中でファシズムに反対する立場からリベラルはマルクス主義と手を携えるのが歴史的な必然といった感じがあったのでしよう。丸山氏自身は個人主義者で、マルクス主義のいやな面、奇妙な面をしっかりと見すえていたとしても、知識人・イデオログの立場においては市民的自由主義とマルクス主義は地続きだった。アメリカ的な自由主義からすると、日本的な容共リベラリストは考えられないわけで、形を変えた反米主義ではないかと警戒された。丸山氏は、こうした冷戦的状況で日本において代表する人としてしまえば、そのレッテルを丸山氏自身はがさきにはしなかった。

丸山氏が戦後日本で占めていた位置は強いといえば、フランスでサルトルが占めていた位置に似ている。冷戦構造の中でファシズムに反対する立場からリベラルはマルクス主義と手を携えるのが歴史的な必然といった感じがあったのでしよう。丸山氏自身は個人主義者で、マルクス主義のいやな面、奇妙な面をしっかりと見すえていたとしても、知識人・イデオログの立場においては市民的自由主義とマルクス主義は地続きだった。アメリカ的な自由主義からすると、日本的な容共リベラリストは考えられないわけで、形を変えた反米主義ではないかと警戒された。丸山氏は、こうした冷戦的状況で日本において代表する人としてしまえば、そのレッテルを丸山氏自身はがさきにはしなかった。

丸山氏が戦後日本で占めていた位置は強いといえば、フランスでサルトルが占めていた位置に似ている。冷戦構造の中でファシズムに反対する立場からリベラルはマルクス主義と手を携えるのが歴史的な必然といった感じがあったのでしよう。丸山氏自身は個人主義者で、マルクス主義のいやな面、奇妙な面をしっかりと見すえていたとしても、知識人・イデオログの立場においては市民的自由主義とマルクス主義は地続きだった。アメリカ的な自由主義からすると、日本的な容共リベラリストは考えられないわけで、形を変えた反米主義ではないかと警戒された。丸山氏は、こうした冷戦的状況で日本において代表する人としてしまえば、そのレッテルを丸山氏自身はがさきにはしなかった。

丸山氏が戦後日本で占めていた位置は強いといえば、フランスでサルトルが占めていた位置に似ている。冷戦構造の中でファシズムに反対する立場からリベラルはマルクス主義と手を携えるのが歴史的な必然といった感じがあったのでしよう。丸山氏自身は個人主義者で、マルクス主義のいやな面、奇妙な面をしっかりと見すえていたとしても、知識人・イデオログの立場においては市民的自由主義とマルクス主義は地続きだった。アメリカ的な自由主義からすると、日本的な容共リベラリストは考えられないわけで、形を変えた反米主義ではないかと警戒された。丸山氏は、こうした冷戦的状況で日本において代表する人としてしまえば、そのレッテルを丸山氏自身はがさきにはしなかった。

丸山氏が戦後日本で占めていた位置は強いといえば、フランスでサルトルが占めていた位置に似ている。冷戦構造の中でファシズムに反対する立場からリベラルはマルクス主義と手を携えるのが歴史的な必然といった感じがあったのでしよう。丸山氏自身は個人主義者で、マルクス主義のいやな面、奇妙な面をしっかりと見すえていたとしても、知識人・イデオログの立場においては市民的自由主義とマルクス主義は地続きだった。アメリカ的な自由主義からすると、日本的な容共リベラリストは考えられないわけで、形を変えた反米主義ではないかと警戒された。丸山氏は、こうした冷戦的状況で日本において代表する人としてしまえば、そのレッテルを丸山氏自身はがさきにはしなかった。

丸山氏が戦後日本で占めていた位置は強いといえば、フランスでサルトルが占めていた位置に似ている。冷戦構造の中でファシズムに反対する立場からリベラルはマルクス主義と手を携えるのが歴史的な必然といった感じがあったのでしよう。丸山氏自身は個人主義者で、マルクス主義のいやな面、奇妙な面をしっかりと見すえていたとしても、知識人・イデオログの立場においては市民的自由主義とマルクス主義は地続きだった。アメリカ的な自由主義からすると、日本的な容共リベラリストは考えられないわけで、形を変えた反米主義ではないかと警戒された。丸山氏は、こうした冷戦的状況で日本において代表する人としてしまえば、そのレッテルを丸山氏自身はがさきにはしなかった。

丸山氏が戦後日本で占めていた位置は強いといえば、フランスでサルトルが占めていた位置に似ている。冷戦構造の中でファシズムに反対する立場からリベラルはマルクス主義と手を携えるのが歴史的な必然といった感じがあったのでしよう。丸山氏自身は個人主義者で、マルクス主義のいやな面、奇妙な面をしっかりと見すえていたとしても、知識人・イデオログの立場においては市民的自由主義とマルクス主義は地続きだった。アメリカ的な自由主義からすると、日本的な容共リベラリストは考えられないわけで、形を変えた反米主義ではないかと警戒された。丸山氏は、こうした冷戦的状況で日本において代表する人としてしまえば、そのレッテルを丸山氏自身はがさきにはしなかった。

丸山氏が戦後日本で占めていた位置は強いといえば、フランスでサルトルが占めていた位置に似ている。冷戦構造の中でファシズムに反対する立場からリベラルはマルクス主義と手を携えるのが歴史的な必然といった感じがあったのでしよう。丸山氏自身は個人主義者で、マルクス主義のいやな面、奇妙な面をしっかりと見すえていたとしても、知識人・イデオログの立場においては市民的自由主義とマルクス主義は地続きだった。アメリカ的な自由主義からすると、日本的な容共リベラリストは考えられないわけで、形を変えた反米主義ではないかと警戒された。丸山氏は、こうした冷戦的状況で日本において代表する人としてしまえば、そのレッテルを丸山氏自身はがさきにはしなかった。

丸山眞男論

- ◆いまこそ問う 福田恆存か丸山眞男か (坪内祐三) 一諸君! 同時代を生きた保守派の論客と60年安保の指導者を対比し、「インテリであると思うこと」のエゴを指摘
- ◆持続する気分 丸山眞男と戦後啓蒙 (水谷三公) 一論座 マルクス主義「評価」の線には、ファシズムの露払いを務めた反共主義への反発という「気分」があった
- ◆丸山眞男とは何だったのか (佐伯啓思) 一正論 さまざまな意味での「あいまいさ=二重性」こそ、「進歩的文化人」丸山の発揮した影響力の条件だった
- ◆わが友 丸山眞男の生と死 (久野収) 一週刊金曜日9/13 「平和問題談話会」以来の親友である筆者が語る丸山の思い出。「書斎派だが、市民としても行動した」

後書き

衆議院が解散され、ついでに選挙が行われることになり、本誌に「ついでに」はあきらまざるが、有権者の関心は一向に高まっています。言及すべきは、この「ついでに」が新民主主義も政策的には自民、新進両党と大差なく、そして「改革」を叫んでいるのも選挙向けというのを見え見えに透かしつけている。

どの雑誌も、政局の動きを先取りして関連の論文などを掲載していますが、「争点不在」を反映してか焦点が絞られ、ささやかな感じが、個人的には、昨年、青島ノック面知事誕生させた「無党派層」がどんな行動をとるのに関心があります。ともあれ年内は選挙結果と、それを受けた政界再編の動きが話題となるのでしよう。

なお、「雑誌を読む」は次回から「ノック」を一新する予定です。いつもの愛読と、紙面への意見や注釈をお寄せくださる方もお願いいたします。(浩)

山田下さん 8月に亡くなった丸山眞男氏についての文章がかなりあります。久野収さんの「わが友丸山眞男の生と死」(週刊金曜日9/13)は身近な立場の人が書いたもので、全共闘批判についての私の丸山氏への「誤解」が正されました。最近、ポスト冷戦の現代と1930年代が対比されて語られることが多いのですが、その中で丸山氏の業績も見直されているように思います。私自身も「市民」という概念を問はず時に丸山氏が指摘した日本の特殊性をどう考えるかに興味があります。

橋爪さん 丸山氏を直接知っている人が書いたもの、書物を通して丸山氏に接している人の書いたもの、この間にギャップがあるのがおもしろかった。直接知っている人は当然、丸山氏を正確に知る。一方、丸山氏を正確に知る人が書いたものは、価値観を丸山氏の「丸山眞男とは何だったのか」「正論」です。政治思想家の面と一進歩的文化人としての面のうち、佐伯さん以後は前者に焦点をぼけて、丸山氏を厳しく批判しています。日本人として日本について論じながら、西欧の視点に自らを置き、日本の外部に立って丸山氏のことから、あるいは丸山氏が生まれたところの指摘で

現在アメリカで起きている日本社会の特殊性や無責任構造に対する攻撃は丸山氏がかつて言ったことと同じであるとも書いています。たまたま、私たちは丸山氏の問題設定からまた抜け出していないわけでは

中西さん 坪内祐三さんの「いまこそ問う 福田恆存か丸山眞男か」(諸君)、水谷三公さんの「持続する気分 丸山眞男と戦後啓蒙」(論座)、坂本多加雄さんの「丸山眞男と戦後知識人」(T H I S I S 読売10月号)などが、丸山氏のマルクス主義に対する微温的な態度にふれていきます。しかし、戦後ともかく30年代には、ファシズムに対するマルクス主義の陣営を含む人民戦線という考え方があった。第2次大戦を戦った「連合国」の論理です。冷戦構造がなくなった現在、旧連合国や丸山氏のマルクス主義に対するこうした態度も歴史に即して考え直すことができるわけでは、丸山氏の思想家としての評価は時間をかけて考える必要がある。

丸山氏が戦後日本で占めていた位置は強いといえば、フランスでサルトルが占めていた位置に似ている。冷戦構造の中でファシズムに反対する立場からリベラルはマルクス主義と手を携えるのが歴史的な必然といった感じがあったのでしよう。丸山氏自身は個人主義者で、マルクス主義のいやな面、奇妙な面をしっかりと見すえていたとしても、知識人・イデオログの立場においては市民的自由主義とマルクス主義は地続きだった。アメリカ的な自由主義からすると、日本的な容共リベラリストは考えられないわけで、形を変えた反米主義ではないかと警戒された。丸山氏は、こうした冷戦的状況で日本において代表する人としてしまえば、そのレッテルを丸山氏自身はがさきにはしなかった。

